VIEW21臨時増刊号
「学びに向かう高校生をいかに育てるか」
発刊にあたり

小学校教師だった福武哲彦が岡山の地で福武書店を創業してから、ベネッセコーポレーションは今年55周年を迎えることができました。その中で高校教育事業は、その時代・環境に合わせ、学校教育の枠組みを大切にしながら、学力向上を目指した受験指導支援を軸に、進路指導支援に領域を広げてきました。少子高齢化が進み、世界の中で生きる子どもたちに必要な教育として、何を主眼に置くべきか。このことを、高校生の未来を見据えて教育を実践されている先生方と共に考えたいと思ったことがこの臨時増刊号発刊のきっかけです。

この1年、さまざまな企業幹部の方と共に研修に参加する機会を得ました。そこで気付いたことが二つあります。一つは、社会の第一線で働く方々は、新入社員を含めた若い世代の個性・特性に悩むことが多く、ゆえに会社にどんな人材が入社してくるか非常に関心が高いということ。もう一つは、家庭では保護者の立場でもあり、入試制度の変化だけでなく社会を生き抜くために必要な力の変化に不安を感じているということです。おそらく「教育」に関して、社会を構成する大人の多くが不安を感じているのではないでしょうか。

学校教育が進むべき方向を、社会の視点、保護者の視点も加味しながら確認、整理し、教育現場を支える先生方と共に考えたい。「VIEW21」臨時増刊号を媒介として意見交換、議論を繰り返しながら、将来への道筋を発信し続けたい。そして、私たちベネッセの役割も、高校と家庭、社会との関係性の中から、再度整理したいと考えています。日本のどこに住む生徒にも、学校教育、家庭学習への支援を通して、可能な限り高いレベルの教育機会を提供できるよう努力を続けます。ぜひ忌憚のないご意見をお寄せいただければ幸いです。

ベネッセコーポレーション
教育事業本部　高校教育事業ドメイン長
山河健二

VIEW21 ビュー21●高校版 臨時増刊号 2010 EXTRA EDITION

CONTENTS

学びに向かう高校生をいかに育てるか

Vol.1 高校と社会のつながりを考える

第1部 「課題と展望」編

4 Part 1 データでみる高校生の「学び」に関わる課題

6 Part 2 高校生座談会
私たちのやる気――背中を押された瞬間

10 Part 3 教育関係者＋企業人座談会
自ら学びに向かう高校生をいかに育てるか

16 Column 高校生と向き合う「高校現場」の声より

18 Column 高校教育と共に歩くベネッセコーポレーションの「現場」より

第2部 「事例」編

20 事例1 「教科学習」で学びに向かう
模試復習のサポートを通して「自立学習」の定着を促す

24 事例2 「教科外学習」で学びに向かう
実社会とつながる体験型学習で生徒が「学ぶ楽しさ」を実感する

28 事例3 学びに向かう「土台」づくり
自ら学び、考える力を育てるために――「語彙・読解力検定」開始

32 次号（臨時増刊号 Vol.2）に向けて／編集後記

http://benesse.jp/berd/ 本誌記事は、Benesse教育研究開発センターのウェブサイトでもご覧いただけます

本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。本文中、敬称略。本誌記載の記事、写真の無断複写、複製および転載を禁じます。

声、学校現場の声、企業人の声を基に考える。

学びに向かう
高校生を
いかに育てるか

第１部

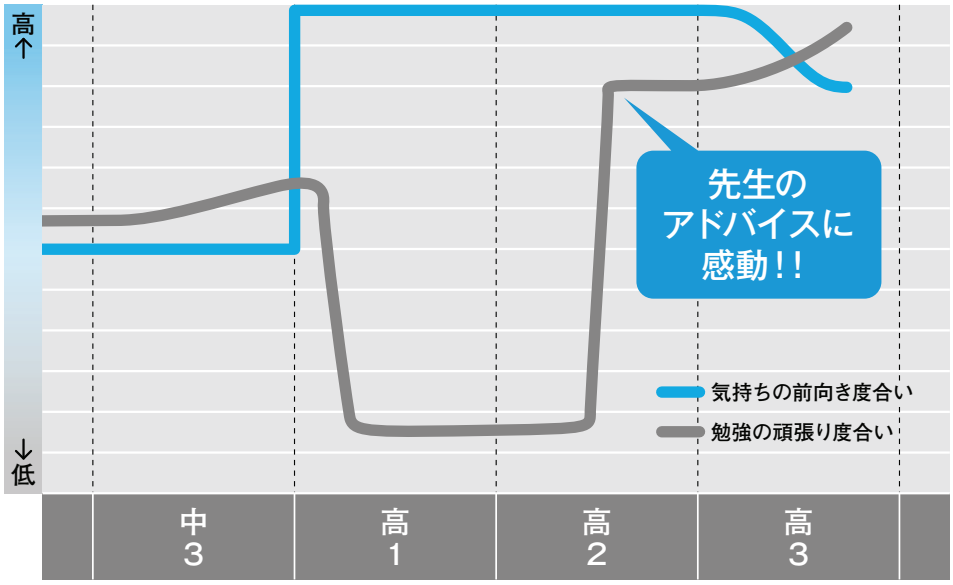
「課題と展望」編

大学入試環境の変化
大学入試が全体として易化

企業の求める人材像
社会人としての常識、マナーに加え、チームワーク力や問題解決力などを重視

「学力」に関する国際動向
日本の高校生の PISA「読解力」のスコアが低下

科目の得意、不得意で進路を考えていた高校生の「やる気曲線」②



企業人

生徒の意欲低下は
大人がパワーをなくしているから

楠本銀次郎

一人がいい加減だと組織は成り立たない

小島和真

「やりたいこと」「やるべきこと」「出来ること」
の三つを重視

杉本雅史

高校生が学びに向かうために、課題となっていることは何か。調査データ、高校生の

Part 1
データでみる高校生の「学び」に関わる課題

P. 4

生徒の実態
勉強しようという気持ちがわかない高校生は6割以上

保護者の実態
生徒の「相談にのってくれる」保護者が増加

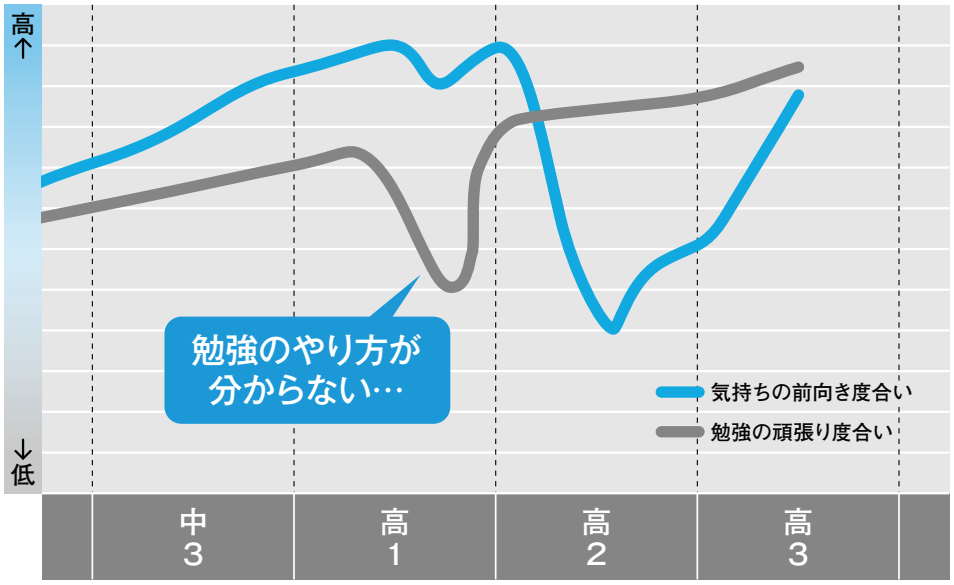
学習指導要領の改訂
知識・技能の習得に加え、知識を活用し、思考、判断、表現する力が重視される

高校生のやる気
背中を押された瞬間はいつか

Part 2
高校生座談会

P. 6

中学校まで塾中心の勉強をしてきた高校生の「やる気曲線」①



高校生の意欲曲線
（P.6「高校生座談会」に参加した生徒アンケートより抜粋）

学校と企業が
どう連携していけば良いのか

Part 3
教育関係者＋企業人座談会

P. 10

教育関係者

失敗しては再チャレンジを繰り返す中で目標を見つけてほしい

石黒文雅

「やれば出来る」「夢はかなう」と軽々しく言ってはいけない

大沼敏美

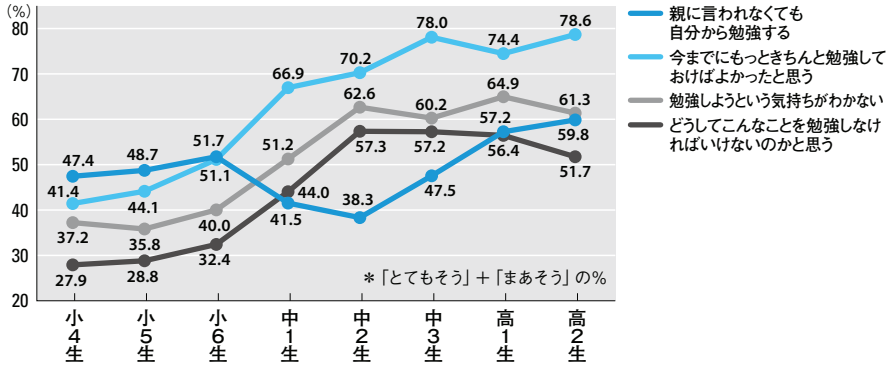
自分の専門教科の学問体系を、自信を持って伝えることも大切

寺島 求

Part 1

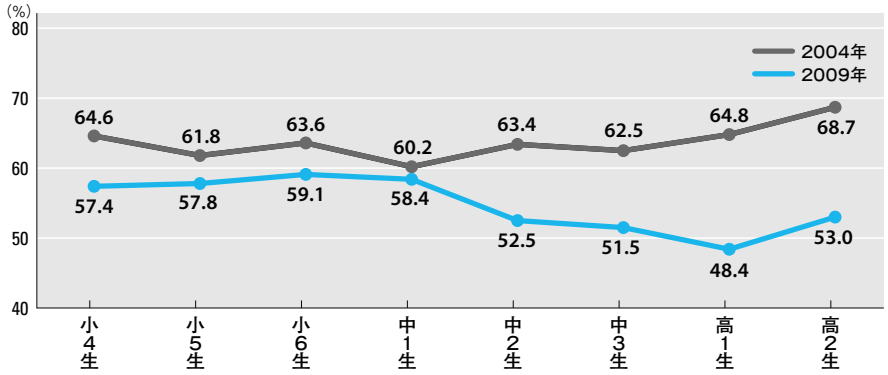
データでみる高校生の「学び」に関わる課題

図1 学習の取り組み方



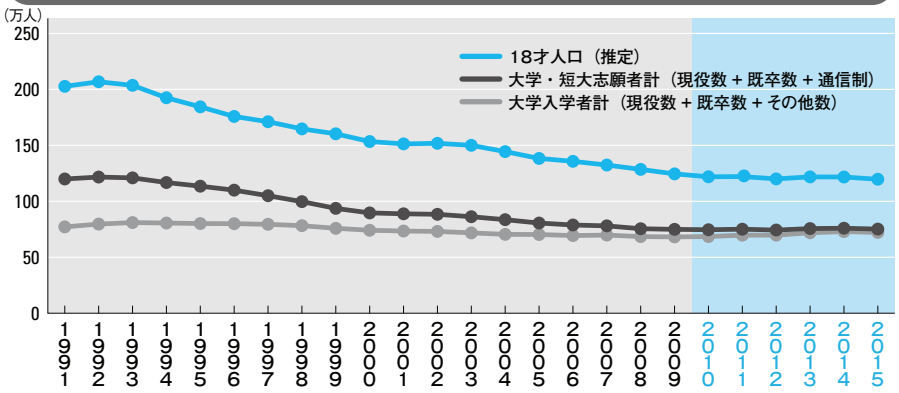
出典／Benesse 教育研究開発センター「第2回子ども生活実態基本調査」（2009年）

図2 「将来なりたい職業がある」と答えた割合



出典／Benesse 教育研究開発センター「第2回子ども生活実態基本調査」（2009年）

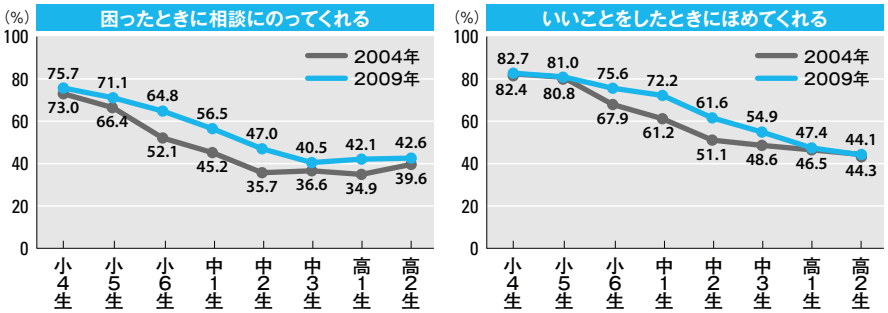
図3 18歳人口と大学志願者、入学者数



2009年度学校基本調査を基に編集部にて作成（2010年以降はベネッセ推定）

図4 子どもと保護者との関わり

Q. 親との関係について、次のようなことはあてはまりますか。 親子関係（経年比較・学年別）＊複数回答



出典／Benesse 教育研究開発センター「第2回子ども生活実態基本調査」（2009年）

半数以上の高校生が勉強する意味が分からない

小学4年生から高校2年生までの学習の取り組み方を見ると、過半数の高校生が勉強する意味が分からず、勉強する気持ちがわかないと回答している（図1）。将来なりたい職業がある高校生は5年前と比べて減少している（図2）。こうした実態の背景として、18歳人口が減少し、大学入試全体が易化傾向であること（図3）や、高校入学前までの親子の関わりが強くなっていること（図4）なども考えられる。

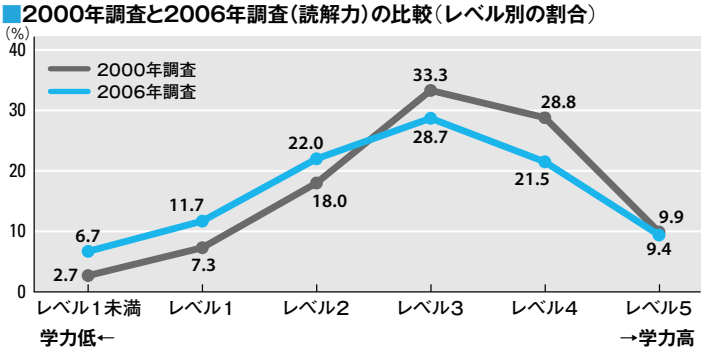
PISA調査によると、日本の高校生の読解力は低下傾向である（図5）。読解力は企業採用時にも重視されており、約半数以上の企業が重要だと回答している（図6）。また、9割以上の企業が重視している力は、社会人としての常識・マナーやチームワーク力である。

図5 PISA調査における日本の結果

■2000年調査と2006年調査（読解力）の比較

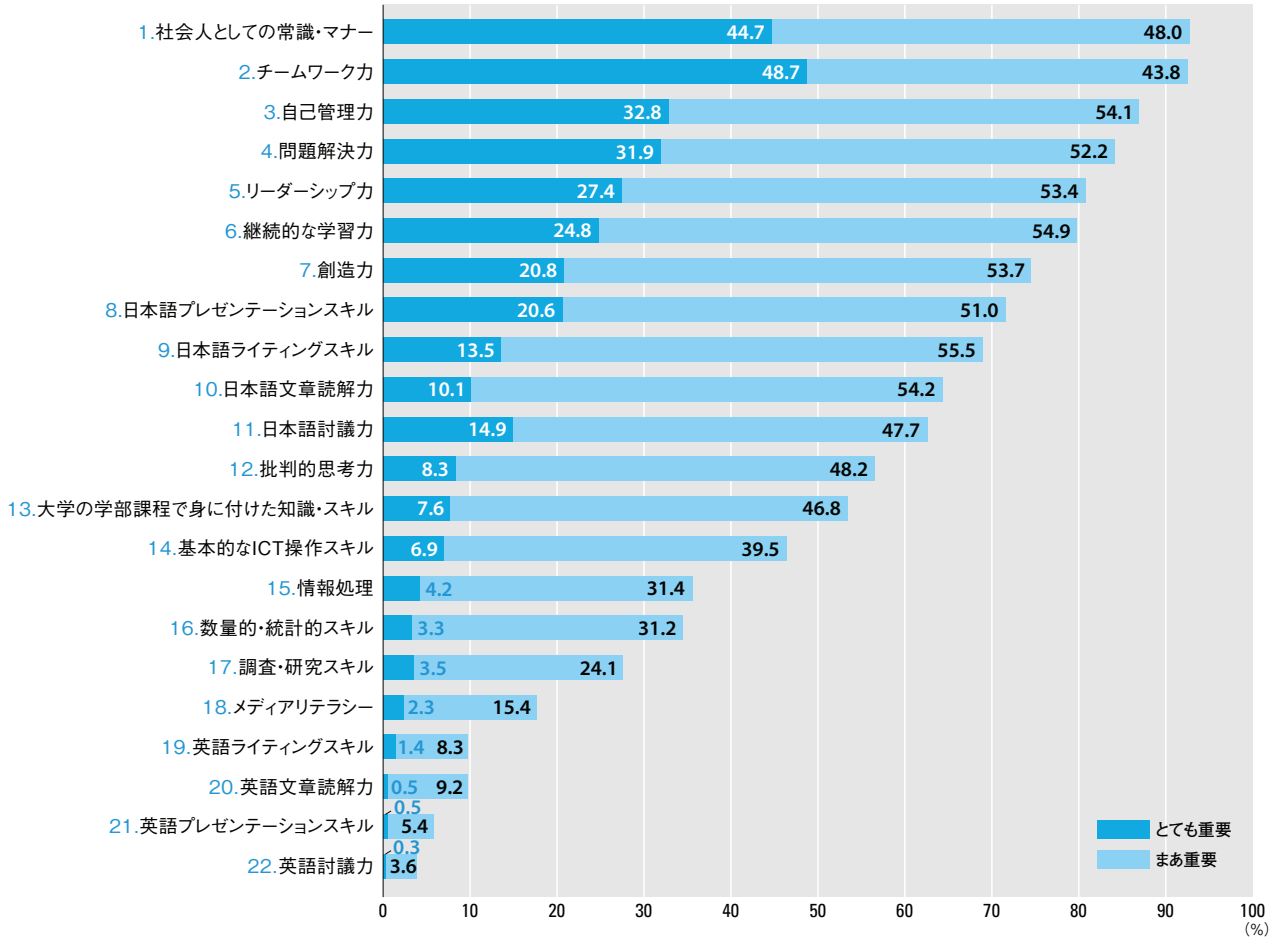
	2006年調査	2000年調査
日本の得点	498点	522点
OECD平均	492点	500点
OECD加盟国中の順位	12位	8位
全参加国中の順位	15位	8位

■2000年調査と2006年調査（読解力）の比較（レベル別の割合）



出典／「OECD生徒の学習到達度調査（PISA）2006年調査国際結果の要約」より抜粋

図6 企業が大卒者の採用時に重視するスキル



出典／ Benesse 教育研究開発センター「社員採用時の学力評価に関する調査（企業対象）」（2008年9月）
＊文部科学省委託『大学卒業程度の学力を認定する仕組みに対する調査研究』（2008年12月）所収

Part 2

高校生座談会

私たちのやる気——背中を押された瞬間

高校生はどのような時にやる気になるのか。進研ゼミ高校講座を受講している高校生6人に、「教師」「授業」「保護者」「友だち」とのさまざまな関わりの中で「やる気が出た」と感じた場面や出来事について語ってもらった。

参加者

ヒロキ　私立高校2年。横浜国立大経営学部志望。夢である会社経営の実現に向けて公認会計士を目指す。モットーは「つねに前向きに考える」

ハルカ　公立高校3年。吹奏楽部に所属。法学部志望。テレビはあまり見ず、読書が趣味。モットーは「一日一善」

ユキナ　公立高校3年。合唱部など複数の部活に所属。大学は文学部で日本史を学びたい。モットーは「自分のやりたいことはやる」

タクヤ　公立高校2年。ギターや少林寺拳法など多趣味で、友だちも多い。埼玉大を志望。将来の夢はゲームクリエイター。モットーは「何事もおろそかにしない」

高校生 × 教師

先生に『だめだな』と言われ、『見ていろよ！』と燃えました

ヒロキ

——勉強に関する先生の働き掛けで「自分は変わった」と感じたエピソードや心に残る一言を教えてください。

ヒロキ　僕は、厳しい言葉を掛けられると燃えるタイプです。以前、先生に「お前たち、全然だめだな」と言われた時、「見ていろよ！　絶対に成績を上げてみせる」と心に誓いました。でも、その先生は僕たちのやる気を引き出すために、わざとそう言ったみたいです。先生の言葉で僕はそれまで以上に勉強するようになりました。先生に反発していた友だちもいたけれど、先生の指導が良いのは誰もが認めていて、みんなきちんと授業を受けています。

ハルカ　中学時代の話ですが、部活顧問の先生の厳しい言葉遣いでの指導がつらくて、勉強する気が全く起きない時期がありました。言われた通りに出来ないことでまた落ち込んで……。でも、3年生になってから少し気持ちが変わりました。あえて厳しい言葉で伝えたいことがあったんだなと分かったんです。それからは、指導をしっかり受け止められるようになりました。先生が私たちを一生懸命に育てようとしていることが伝わり、今ではその先生に出会えたことを感謝しています。

高校生 × 授業

——どんな先生の指導が心に響きますか。また、どんな授業に引き込まれますか。

ユキナ　ハルカさんが言ったように、学年が上がるにつれて、先生に対して感じることは徐々に変わってきていると思います。中学時代には生徒を褒めたり、面白いことを言ったりする先生の人気が高かったけれど、今は厳しくても、授業が分かりやすい先生の方が信頼されていると思います。

ヒロキ　生徒との距離感も大切だと思います。授業中に雑談が多い先生がいて、勉強とは直接関係ない先生自身の体験談が大半だけど、何げない話から先生がどんな人なのかが伝わってきて親近

司会

ベネッセコーポレーション
高校事業部
梅井留美

サエコ　私立高校3年。北海道大志望。他人に悩みを打ち明けるのが苦手。将来の夢は「良いお母さん」。モットーは「清く明るく素直であれ」

ナナミ　公立高校2年。病気の祖母を看病した経験から看護師を目指し、国公立大の看護学部を志望。モットーは「笑顔は一人ではつくれない」

感がわきます。授業も分かりやすく、その日の課題が終わったらチャイムが鳴るまで雑談をするんです。友だちと「あの先生の授業が楽しみだね」と、いつも話しています。授業もしっかり受けようという気になるからみんなテストの点数も良いです。

タクヤ　僕が良いと思う先生は、生徒の目線を大切にしている人です。そういう先生には、優しさや思いやりを感じて何でも相談したくなります。自分の話したいことだけを一方的に話す先生は苦手です。

サエコ　「この子がお気に入りなんだ」と感じてしまうほど、生徒への態度がばらばらな先生は苦手です。

受験勉強だけでなく、社会に出ても役立つことを学びたい　ナナミ

サエコ　中学時代は塾に通っていて、学校の勉強は復習と考えていました。今の高校は「塾に通うな」という方針なのですが、自分1人で勉強を進める方法が分からず、成績も下がりました。授業では、勉強の仕方も教えてくれたらいいのにと思います。

ヒロキ　数学の先生が放課後に何でも質問できる自由参加の補習を開いてくれました。生徒に好評で、授業のフォローをしっかりしてくれる先生はいいなと思います。テストの後も個別に弱点を指導してくれたら、学力がすごく伸びると思います。

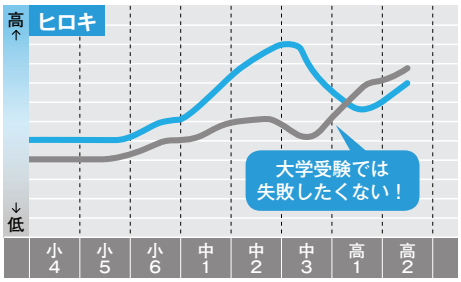
ナナミ　現代社会の先生で、小論文やディベートを通して、自分の考えを表現する方法を教えてくれた先生がいました。そういう力は、受験が終わって社会に出てからも役立つので授業でもっと教えてほしいです。この先生は、授業の中で生徒に伝えたいことがあるんだなと強く感じました。

ユキナ　地理の先生が最初の授業で「地理は受験ではあまり使われないけど、物事にはいろいろな見方があり、その中に地理的な見方もある」と話してくれたのが印象に残っています。地理を学ぶ意味を理解してから勉強に入れたのは良かったです。

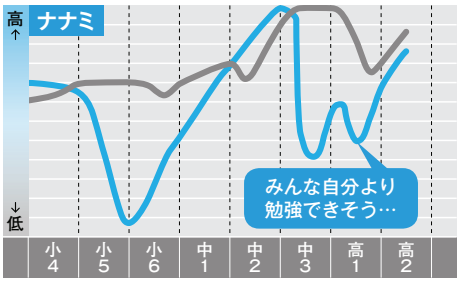
ハルカ　歴史の先生は、アウシュビッツや原爆ドームを見学した時の話をしてくれました。実際に被爆者から聞いた話など内容が深く、先生自身が関心を持っているのも伝わってきて、とても興味深く学べました。

ユキナ　授業や私たちへの接し方から感じるのですが、先生には部活などでとにかく子どもといるのが好きなタイプの先生と、専門の教科の素晴らしさを伝えることに情熱を燃やすタイプの先生がいるのではないでしょうか。授業を受けると、どちらのタイプの先生なのかが分かってきます。でも、私たちからすれば、どちらかだけではなく、私たちのことを一生懸命親身になって見てく

やる気曲線　座談会参加高校生に「勉強の頑張り度合い」と「気持ちの前向き度合い」を今までの人生を振り返って図式化してもらった。
―が「勉強の頑張り度合い」
―が「気持ちの前向き度合い」



中3で部活に力を「入れすぎた」ため高校受験では第1志望に合格できず。「絶対に大学は狙ったところに合格してやる！」と強い気持ちでいる



進学校に入学。周りに勉強が出来る人が多く、気後れして勉強のやる気もダウン。2年生に進級してからは心機一転、頑張ろうと思っている

れて、しかも授業に情熱のある先生、両方を兼ね備えた先生が理想的だと思います。

『君が本当に学びたいのは日本史だろう』という言葉に感動

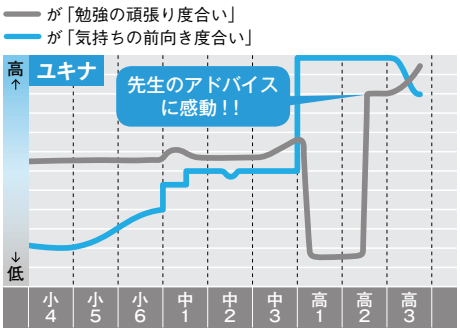
ユキナ

――皆さんの進路を決める上で、先生とのかかわりについて聞かせてください。

ナナミ　私は看護師になりたいのですが、担任の先生から「医療系を目指すなら医学部がいい」と何度も勧められました。看護師と医師は仕事が全く違うのに、私の気持ちを聞いてくれず、本音で話をする気がしなくなりました。

ハルカ　悩み事がある時は、出来るだけ多くの先生の意見を聞くようにしています。2年生の科目選択では、「法学部志望だけれども、世界史と日本史のどちらを選べば良いですか」と先生に質問して回りました。「世界史が後々役立つ」「好きな方を選べば良い」などいろいろなアドバイスをもらって、結局は自分が好きな日本史を選びました。違う意見を聞くことで、それぞれのメリットを踏まえて選べたと思います。

ユキナ　私は日本史が好きなのですが理系科目も得意で、親には「就職に有利だから理系に行け」と言われていました。だから、自分は理系だと漠然と思っていたら、担任の先生から「君が本当に学びたいのは日本史だろ。好きな道を選んだらどうだ」とズバリと言い当てられたんです。「なぜ私の迷っていることが分かるんだろう」って感動しました。結局、この言葉に背中を押されて文系を選びました。これまで理系に進むつもりで英語や国語をおろそかにしていたけど、今、必死に頑張っています。やる気が出ない時は、あの時の先生の言葉を思い出しています。



中学・高校と部活や生徒会活動が充実。高校入学後は、学校生活が楽しく気持ちは常に前向き。高2の時に先生の進路アドバイスに感動して、一気に勉強のやる気が高まった

高校生 × 保護者

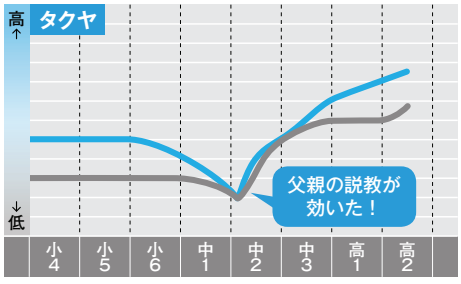
――では、保護者の方には進路について、どのように相談していますか。

父親の説教2時間コース、キツかったけど効きました

タクヤ

タクヤ　自分は何でも相談するタイプです。親を信頼しているのは、中学時代にガツンと怒られたことがきっかけです。テストで良い結果が出ず、やる気が起きない時期がありました。その時、父から2時間も説教をされました。正直、「早く終わってほしい」と思っていたけれど、言われることが的を射ていたので胸に刺さりました。「いい大学に行けないぞ」と言われたのも効いたけど、「親として全力でサポートするから」という言葉がうれしくて、最も心に響きました。ただ、今では心を入れ替えて勉強しているのに、「ちゃんと勉強しろ」と言われるのが少しうるさいのですが……。

ユキナ　両親とも理系なので、私が文系を選んだことを良く思っていないようです。以前、将来は新聞記者になりたいと話したら、冷やかされたこともありました。親には



中学になって学校の勉強についていけず、気持ちも勉強量も下り坂。中2の時に父親の「お説教」が効いて、勉強のやる気も気持ちも前向きになり、現在もそれは続いている

全国の高校生に聞いた 学びのホンネ

学びの気持ちが「上がる」とき

- 自分が将来希望する職業に就いている人の話を聞いたとき
- 給料が大卒の方が高いと聞いたとき
- 友達に「どこの大学に行く？」と聞かれ、胸を張って言えないとき
- 「おまえじゃ無理だろう」と友だちに言われたとき。悔しくていつか結果で見返したい
- 自分が全く出来ないことを周りの人がやすやすと出来るのを見たとき
- 尊敬する先生の授業は、失望させたくないと思って頑張って、テストで良い点を取る
- 進級したり、新しい教科が始まるときは、勉強する気になる
- 両親に「人並みの努力では人並みにしかなれない」と言われたとき。限界を突破してやろうと思った
- 母が「今頑張れば、きっと未来は笑顔でいられるよ」と言ってくれた

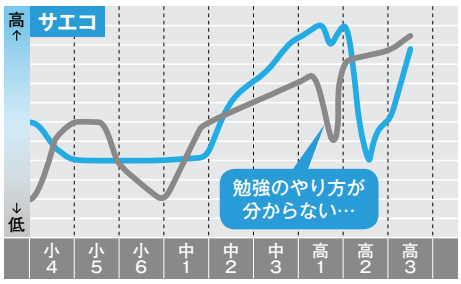
学びの気持ちが「下がる」とき

- やることが多すぎて、何をすれば良いのか分からず、やる気がなくなった
- 一般入試に挑戦したいのに、合格がより確実な系列大学の推薦入学を母に勧められ、やる気がなくなった
- いくら頑張っても数学が出来るようにならず、ずっと赤点ばかり。だんだんやる気もなくなってくる
- なにかにつけて「ゆとりだから」は禁句。好きでゆとり教育を受けているわけじゃない
- 「黒板と」授業している先生の授業はつまらない

高校生対象の進路・学校生活に対する意識調査アンケートの回答より抜粋（高校生向けWEBサイト「Benesse マナビジョン」とインタビューにて実施、実施期間は2010年3～5月、回答数200）

学校での出来事は話すけど、進路についてはほとんど相談していません。

サエコ　私も親には勉強や進路のことはあまり話しません。父は高校時代に全国模試で1位を取ったほど頭が良いので、私が勉強で分からないことを質問しても、何が分からないのかが理解できないようです。母は私よりも妹のことが気になっているようで相談しづらいし。元々、私は誰かに相談をするのが苦手で、1人で考えるタイプなのだと思います。実際に悩んだときに相談できる友だちを高校でつくっておかなかったのは失敗だなと思っています。



ずっと塾に通っていたため、高校になって1人で勉強する方法が分からず成績が落ち気持ちも下がるが、志望大学がはっきりしてからは、やる気も一段と高まった

高校受験失敗が悔しくて『絶対東大に合格するから！』と宣言した
サエコ

ハルカ　よく親が一方的に話し掛けてきて、落ち込んでいる時は「放っといて！」と思います。特に母親が頑固で、先生に言われたことを話しても、「私はこう思う」と主張を通そうとするのがつらいです。先生から「この参考書がいい」と薦められた時も、「他の参考書をやってないのだから必要ない」と言われ、結局、自分で買いました。だから、相談はなるべく父にしています。

ヒロキ　僕も父親と母親で話題を変えています。母には学校での出来事を話し、父には時事問題について質問しています。日曜は父親が料理を作り団らんの時間を過ごす決まりになっているので、家族との会話の時間は比較的多いと思います。でも、僕は基本的に何でも自分で決めるタイプなので、進路の相談はほとんどしません。決めてから話すと、大抵「分かった、頑張れ」と言われます。

サエコ　私は、第1志望の高校の受験日に体調を崩してテストの出来が悪く、不合格になってしまいました。塾にお金が掛かったこともあって父にとても叱られて、悔しさと罪悪感から、その時は「絶対、東大に合格するから！」と、泣きながらタンカを切ったくらいです。この経験があるから大学受験は絶対に失敗したくないです。今は、北海道大を目指しています。志望が明確になってからは、「北海道」という文字を見ただけでやる気が出ます。

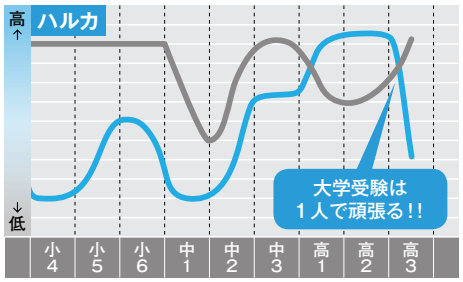
高校生 × 友だち

――友だちの存在は、皆さんのやる気にどのような影響がありますか。

友だちが塾に通い始めて焦るけど私は1人で頑張りたい！
ハルカ

ヒロキ　僕のモチベーションは友だちに負けたくないという気持ちです。小学校受験に失敗してから、受験には良い思い出がなくて……。中学受験はずっと考えていませんでしたが、小6の終盤に中高一貫校を受けることに決まり、あわてて勉強したけど不合格でした。中学校生活は吹奏楽部がすごく楽しくて勉強に身が入らず、高校受験も失敗。部の友だちがみんな進学校に合格し、自分だけ取り残されたのが悔しくて、高1の時に「大学受験は絶対に成功させる」と決意して、今もやる気が続いています。

ハルカ　中学時代は成績は良かったのに、高校ではみんなも出来るので下から数えた方が早いくらいです。勉強は嫌いではないけど、少しやる気がなくなっています。3年生になり、友だちが塾に通い始めて焦ったけど、親から「お金がないから」と言われて、自分で勉強しようと決心しました。塾に行かなくても自分で勉強できるようになりたいと思います。今は、友だちと「大学に行ったら、あれをしよう」と、いつも話をしています。それを実現したいという気持ちが、私のモチベーションになっています。



中学の先生の厳しい指導で気持ち・勉強量ともに落ちるが、指導の意図が理解でき前向きに。今は「1人で勉強を頑張ろう」と大学受験に向かっている

――皆さん、ありがとうございました。これからも、勉強や友人関係など、充実した高校生活を送ってください。

Part 3

教育関係者＋企業人
座談会

自ら学びに向かう高校生をいかに育てるか

高校生一人ひとりの心に火をつけ、学びに向かわせるにはどうすべきか。
教育関係者と企業人が教育現場と実社会をクロスさせながら、高校教育の今とこれからを語り合う。

意欲に関する課題の所在

山河　皆さん、本日はよろしくお願いいたします。

本日の大きなテーマとして、生徒の「意欲」を取り上げたいと思います。現在、毎年約１００万人いる高校卒業者の７割以上が進学し、少子化の影響もあり、「全入」状態の大学が増えています。ところが、学びの機会が保障されるほど、「なぜ学ぶ必要があるのか」という生徒からの問いかけが増えている気がします。意欲が低いまま進学して社会に出て、果たして成長し続けられるのかと不安を感じます。生徒、あるいは若い社会人の意欲に関して課題と思われることを率直にお話しいただけますか。

寺島　今の高校教育では、早くから将来の進路や目標を決めるように仕向け過ぎていることが、逆に可能性を狭めて意欲を失わせる要因になっていると感じます。

石黒　同感です。確かに高校の進路学習では、「どのような仕事がしたいか」「どの学部に進むか」など、将来の道筋を見つけるように促します。しかし、自分に向いている職業が分かる高校生の方がまれです。そうした状態で絞り込むと、受験も含めて失敗が一切許されないという気分になり、少しつまずいただけで「もうだめだ」とあきらめてしまいかねない。これでは、じっくり構えて学ぶ気持ちにはなりません。本当は、多くの出会いを体験し、失敗しては再チャレンジを繰り返す中で、目標や適性を見つけてもらいたいのです。

「天職」を
誤解させない

石黒文雅

山河　おっしゃる通り、本来、進路学習は将来の可能性がどんどん広がる「末広がり」が望ましいと思います。しかし現実は、文理選択などによって進路を収束させています。その延長線上にある

参加者

◎教育関係者

福岡県
私立筑陽学園高校
石黒文雅
Ishiguro Fumimasa

山形県教育庁
高校教育課
大沼敏美
Oonuma Toshimi

東京都立西高校
寺島 求
Terashima Motomu

◎企業人

日本通運株式会社
営業企画部
楠本銀次郎
Kusumoto Ginjiro

株式会社東芝
社会システム社 企画部
小島和真
Kojima Kazumasa

武田薬品工業株式会社
ヘルスケアカンパニー
杉本雅史
Sugimoto Masashi

◎ファシリテーター

株式会社
ベネッセコーポレーション
教育事業本部
高校教育事業ドメイン
山河健二
Yamakawa Kenji

のか、当社の入社試験の面接では、多くの学生が狭い視野で自分の将来のシナリオを話すのが気に掛かります。

楠本 確かに新入社員の多くが、「この仕事をしたい」という限定的な希望を持っていますが、なかなかその通りにはいきません。会社が本人も気づかない能力を見いだし、異動させることもよくあります。私も人事希望でしたが、ずっと営業職を楽しくやっています。

石黒 どのような環境でも頑張り切れる人が生き残れるのではないかと、私も思います。与えられた条件の中で頑張ってみて、何かを見つけてはじめて天職といえるのではないでしょうか。高校時代に「これが自分の天職」と誤解させることは避けなくてはなりません。

楠本 生徒の意欲低下は、大人がパワーをなくしていることと関係があると思います。日本の企業はグローバル化の波に押されて自信を失いかけ、政治もぐらついています。高校生はそうした大人の不安を敏感に感じ取っているはずです。企業としてもっと頑張り、常に胸を張っていなくてはならないと改めて思います。

大沼 経済のグローバル化や仕事の高度化が進み、企業が新入社員に求めるレベルが上がっている気もします。その要求が高校現場にも反映されているのではないでしょうか。

山河 雇用問題が教育に及ぼす影響は大きいと思います。とりわけ就職難の近年は、就職を意識せざるを得ないのが現状です。

そつなく仕事をこなすが、周囲を巻き込む力が弱い

杉本雅史

小島 採用の話をしますと、私が面接で最も重視するのは、優秀かどうかではなく、「一緒に仕事をしたいか」「部下にしたいか」ということです。限られた時間で「何か持っていそうだ」ということを感じ取るようにしています。

杉本 その人の良さをいかに見つけて引き出すかという視点を重視するのは、当社も同じです。

山河 今の生徒は、一対一のコミュニケーションに慣れ過ぎている印象を受けます。例えば生徒への講演では、全体に向けた話を自分のことに置き換えて解釈する力が落ちていると感じます。

寺島 確かに、人の話を聴く態度や斟酌（しんしゃく）する理解力は弱まったと思います。

杉本 一対一に慣れていることと関係するかもしれませんが、若い社員はそつなく仕事をこなしても、周囲を巻き込む力が弱い。これは仕事が出来る人間でも同じです。

山河 自分が話せば、人は必ず聴くものだと思い込んでいるようです。「人は自分の話など聴きやしない」という認識も必要だと思います。

大沼 保護者にも一対一のニーズが強くあります。それを受けて成績表を保護者に送付したり、個別に面談したりする大学もあります。学校教育は集団での指導が基本だと思いますが、一対一の応対をしないと、生き残れなくなりつつあるのも現実です。

杉本 保護者の介入が増えたのは、少子化の影響もあるのでしょう。大学院を修了した新入社員でも、トラブルが

あると「一体、会社はどんな指導をしているのか」と保護者が出てきます。

石黒　それは教師の世界も同じです。新任教師の保護者が学校に来て「どういう新人教育をしているのか」と詰め寄る場面もあるようです。

寺島　今の生徒は、粘り強さという点にも課題を感じます。数学の定期考査では、難度の高い2割の問題を最初から解かない生徒がいます。大学入試であれば一つの戦術かもしれませんが……。壁にぶつかった時こそ乗り越えようとする気持ちを育てたいところです。

石黒　教師が良かれと思って厳しく教科指導を行うと、「自分は必要とされていない」と誤解して自信を失う生徒も目につきます。悔しさから奮起する気持ちが弱まっているのでしょう。知的飢餓体験がなくて、ハードルを下げて満腹感を味わうことに慣れているんですね。これは、どの学力層の生徒にもいえることです。うそでも良いから「大丈夫だ」と言われて現状肯定したいという気持ちがあるようです。進路選択にも同じことがいえますね。

学校と社会をつなぐために

山河　自立とは、自分と社会との関係を自力で作れるようになることだと思います。高校では、そのような意味での自立を促す指導も大切にされていると感じます。

大沼　そうですね。例えば、世界史の教師が少し勉強から離れ、歴史学習が社会とどうつながっているかを話すことが、自分と社会との関係を考えるきっかけになり、学習の動機付けにもなります。そういう話をする教師は魅力的に映り、周囲に生徒が集まります。生徒はその辺りに非常に敏感です。

また、生徒の自立を考える時に忘れてはならないのが、学力中下位層への支援です。比較的単純な仕事が減り、ある程度勉強すれば、誰でも安定した職を得られる時代ではなくなりつつあります。今後、こうした層の生徒が自立した人生を送れるようにすることは、社会全体の課題だと思います。

寺島　生徒の学習状況に課題のある高校ほど、部活動の加入率は低い傾向にあります。元々の意欲の低さが関係しているのでしょう。

そうした生徒を変えるには、まず自信を持たせることが必要です。以前、就職する生徒が多い専門高校で数学を教えていた時、テストは教科書レベルの易しい問題に限定しました。それで80点くらい取れると、段々とやる気が出てくる。文化祭を自由に企画させ、「学校のために役立った」経験を持たせたりもしました。卒業後は就職し、やがて結婚して家庭に入る女子生徒が多かったため、「頑張れば何とか出来る」という自信を持って母親になってほしかったからです。実際、中学時代に失われた自信を取り戻して卒業した生徒も多かったように思います。

楠本　企業も同様で、新入社員は基本的に褒めて育てます。仕事を任せて陰で支え、成功体験を積ませると、どんどん意欲的になります。ただ、放っておいても出来る人もいますが、全員がそうではありません。状況を見ながら支援し、モチベーションを維持させることが大切です。

杉本　自分の価値観をしっかり確立できていれば、自分の状況を把握して気持ちが揺れにくくなると思います。

小島　そうですね。特に高校生という多感な時期には、「自分の軸」を作ることを大切にしていただきたいです。

私の場合、高校の先生が言っていた「One for all, all for one」という言葉が心に刻まれています。一人がいい加減だと、組織は成り立ちません。今の仕事でも組織力を大事にし、「みんな楽しそうに働いていますね」「目標に向けて団結していますね」といい

多感な時期には、
「自分の軸」をつくることを
大切にしてほしい

小島和真

った言葉を掛けられると、とてもうれしくなります。

大沼　社会が複雑化して生徒に求められるレベルが高まっていることを考えると、学校・家庭・社会が役割分担するのではなく、つながりを重視する必要もあるでしょう。「開かれた学校づくり」と盛んに言われますが、学校内に招くだけではなく、生徒が学校の外に出て、教師や保護者以外の社会人と接する機会がもっと必要だと感じます。

その際は、ぜひ教師も一緒に外に出ていただきたい。生徒とは違った視点で社会を見て、それを生徒に語ってあげることが出来ますから。

山河　地域や企業と協力し、そこで人々がどう生きているかを体感させてあげたいものですね。

杉本　自分の子どもの頃を振り返ると、近所の人から叱られる経験が多かった気がします。そうした役割も学校に任されていると考えると、やはり学校だけに過度の期待があるのかもしれません。

我々もCSRに力を入れていますが、これまでは環境活動やNPO団体への支援などが中心でした。教育の重要性を考慮すると、もっと学校や地域社会に目を向ける必要がありそうです。子どもに活動を通じた実体験があれば、詰め込み学習とは違い、「必要だからやる」と感じて、粘り強さが生まれるのかもしれません。

楠本　当社では某大学の付属高校の生徒を招き、仕事の体験談を話したりする取り組みを続けています。今後も充実させていきたいと思います。

学校・家庭・社会が役割分担するのではなく、つながる必要がある

大沼敏美

寺島　職場体験できる生徒数が限られるなら、高校から直接社会に出る層を優先してほしいと思います。高校は社会とのつながりを感じさせる一方で、教科の魅力、学問の面白さをもっと伝える必要もあると感じます。

楠本　確かに企業に入ると一定量の教養が不可欠です。「もっと勉強すれば良かった」というのは、後から気づくものですが。

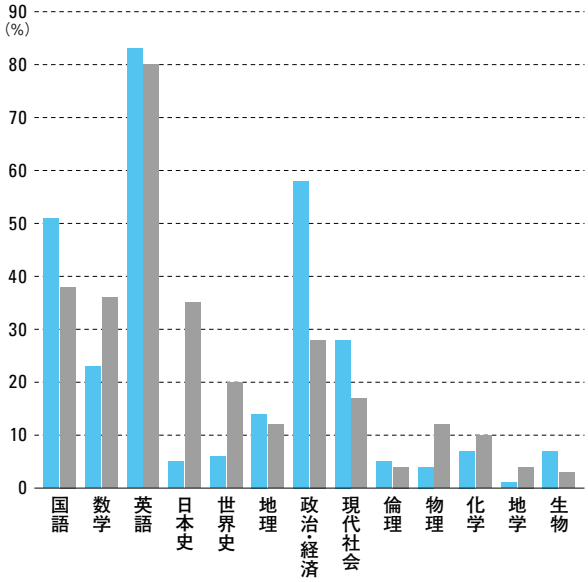
例えば、最近は文系の社員にも数学の発想が求められており、自主的に学ぶように啓蒙しています。

小島　私も同意見です。日本史、特に現代につながる変革期である近代史の知識は、世界の中の日本を把握する上で重要ですから、諸先輩方は独学しています。高校での指導を強化してほしいですし、ベネッセが補完するという方法もあると思います。

杉本　私たちもこの一年間、一般教養を鍛え直す研修を行いました。グローバル化が進む中で外国人ともビジネスをする機会が増え、一般教養は不可欠になっていると感じますし、これから社会に出る人たちにとっては、更に重要になるはずです。

寺島　高校の先生方が元気を失っている要因には、教科指導が受験目的でしかないと、世間から批判的に見られていることもあると思います。受験に捉われず、自分の専門教科の学問体系を、自信を持って伝えることも、生きる力を育てるのと同じくらい大切ではないでしょうか。

図1　教科に関するアンケート　ベネッセ　2010年4月



これからの社会で求められる力

山河　社会で必要とされるであろう力、そして今後の高校教育で特に大切にすべきことをお話しください。

大沼　生徒には学び続ける力とコミュニケーション力の大切さを強調しています。そして、「しなやかさ」があれば何とかなると。

杉本　人生や仕事には、元々正解がありません。仕事では、正解のない中でもがき苦しみ、ひざを突き合わせて交渉し、方向性を見いだす作業の連続です。そこで必要とされる精神力の鍛錬も大切ではないでしょうか。

楠本　高校での手厚い支援を見聞きすると、深く感心する一方で、「それほど甘やかさなくても……」とも感じます。努力せず、後になって失敗に気づくことも、本人にとっては悪い経験ではないはずです。これは少し厳しい発想でしょうか。

小島　そのような教育に転換したら、マニュアル人間が減るかもしれません。

寺島　いつ、どのように自主性を育てるかは、高校教育の永遠のテーマといえます。生徒の自主性が弱まりつつある中で、「やらされている勉強は勉強ではない」と、あくまでも自主性にこだわる教師もいます。その意見はもっともですが、放っておけば大学受験に失敗する可能性が高い。基礎力がないから、浪人しても合格は期待できません。しかも、保護者の間で「面倒見の悪い高校」というレッテルを張られかねません。「本当は自立させたいのに手を離せない」という状況が、多くの高校が抱えるジレンマとご理解ください。

小島　高校に多くを求めるのは、生徒だけでなく、保護者も同じなのですか。

石黒　そういう側面はあります。「預けるから何とかして」という意識の保護者も確かにいます。「朝食をとるように指導して」という要望すらあるようですね。

大沼　日本では学校が面倒を見なければ、教育格差が生じるという危惧もあります。家庭に経済力があれば、塾に通える。では、塾に通えない生徒の面倒は誰が見るのかというと、学校にならざるを得ない。家庭に任せきりにするのは無理があるのです。

　ただ、すべての高校が同じ方針である必要はないと考えます。自主性を重んじる高校、面倒見の良い高校など、いろいろあって良い。選択肢がたくさんあることは、生徒や保護者にとっても悪いことではないでしょう。

教科の魅力、
学問の面白さを
もっと生徒に伝えたい

寺島 求

楠本　そうですね。日本では教育の選択肢があまりにも少ない。高校も大学も、偏差値で選ぶ生徒が大半です。

　企業では、いろいろな人の協働によって多様性に対応する必要があります。学校教育も選択肢を増やして多様な学びを提供する方が、社会的に有用な人材が育ち、結果的に自主性も芽生えるのではないでしょうか。私たちとしては自主的に学び、高校で失敗したら大学、大学で失敗したら社会でやり直せばいいという前向きな発想を応援したい気持ちです。

大沼　確かに「自分で選択して決められる」ということは、「自分が必要とされている」という感覚と共に、本人の幸せにつながる重要な要素だと思います。

寺島　そのような自主的な生徒を育てるには、再チャレンジが出来る環境も不可欠です。例えば、専門学校志望で教科学習をあまりしていない生徒が大学進学を希望した時、学び直しが出来るかと言えば、高校の固定されたカリキュラムの中では難しい。そういう時こそ、一対一の粘り強いサポートが求められますし、ベネッセによるサポートも意義が増すのではないでしょうか。

山河　実際、学び直しの教材は好評です。「やれば出来る」ではなく、「やったら出来た」というコンセプトで、分かる喜びを伝えたいという気持

いつでもやり直せるという前向きな発想を応援したい

楠本銀次郎

ちで開発しました。これまで進研ゼミは教科書対応を重視していましたが、最近になり、「子どもをその気にさせる」ことが、より大切ではないかという視点で教材の見直しを進めています。

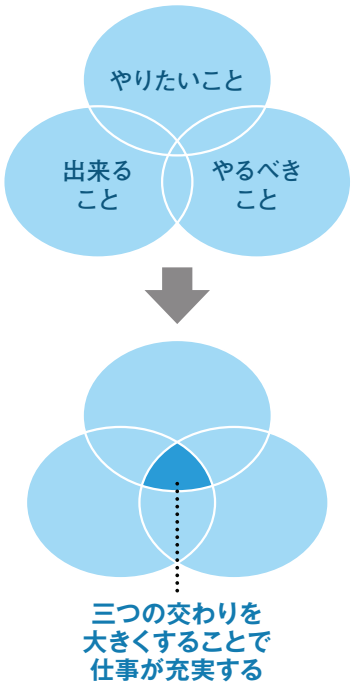
大沼　厳密に言えば、「やったら出来た、こともあった」かもしれませんね（笑）。大人は、「やれば出来る」「夢はかなう」と、軽々しく言ってはいけないと、私は思います。厳しい言い方ですが、誰でもやれば出来るわけではない。それよりもプロセス重視の考え方を大事にすべきではないでしょうか。

寺島　皆さんの企業は、プロセスではなく、結果重視でしょうか。

楠本　そんなことはありません。成果ばかりを見るのではなく、協働作業がきちんと出来ているか、指示の通りに動いているか、また、前向きにチャレンジし、やり抜いたかといったプロセスも重視します。

杉本　社会生活を充実させる上で、「やりたいこと」「やるべきこと」「出来ること」の三つを重視しています（図2）。それぞれをバランス良く広げて、三つの輪が交わる部分を大きくしていくと、仕事や生活が楽しくなります。これは、学校生活に置き換えても一緒だと思います。

図2　仕事のやりがいを大きくする方法



大沼　私もこれと同じようなことを生徒に話しています。学校でいえば、やりたいことは志望校などの目標、やるべきことは勉強、出来ることは教科学力。「医学部に入りたい」という目標だけ大きくても、他の二つが不足していれば実現しません。

「出来ること」については、トレーニングが必要でしょう。苦しい勉強や忍耐も求められます。

石黒　そうですね、英語が使えるようになりたいなら、暗唱、音読など地道なドリルの蓄積は避けて通れません。

山河　部活動なら「レギュラーになりたい」という目標があるから何回でも腹筋が出来る。それが勉強になると、すぐに放り投げてしまうのはなぜでしょうか。

寺島　そこに教え方の工夫が求められるのだと思います。生徒の実態に応じて、本質は変えずに、アプローチの仕方を変える。それを教師全員が心掛けるべきではないでしょうか。

山河　目標に向けて耐える、学び続ける、人の話にしっかり耳を傾ける……。先生方が、こうした人間としての土台が出来てこそ、教科学力が伸びるという考えで指導されている様子が伝わってきました。企業の皆さんが示された、社会で求められる力と方向性が一致しているという感想も持ちました。今後も教育現場と社会のつながりを強化させ、生徒を学びに向かわせる仕組みづくりに取り組んでいければと考えます。本日はどうもありがとうございました。

「やれば出来る」から「やったら出来た」

山河健二

Column

高校生と向き合う「高校現場」の声より

VIEW21読者の先生方に、生徒を学びに向かわせるための手立てを聞いた。

Q. 生徒に現状よりも高い目標に「挑戦」させるために、先生が心掛けていることがあれば、教えてください。

●やはり授業。生徒に学ぶ楽しさ、喜びが伝わることにより、生徒の気持ちが変化していくのだと思う。〈静岡県〉

＊

●生徒に応じて、当面の到達目標、実践目標を具体的に示すように心掛けている。到達できたら褒める。出来なければ、厳しく指導することもある。しかし、生徒が目標を見失わないように配慮することが大切。達成感があれば次も頑張れるはず。〈佐賀県〉

＊

●努力が認められるという実感を持たせること。夢を志へと育て、仲間と行動をともにすることで、未来は予想を超えたものになると、励まし続けること。〈宮城県〉

＊

●「無理」とか「駄目」という指導をしない。「出来る」と励まし続ける。〈千葉県〉

＊

●生徒に自信を付けさせること。そのために、さまざまな情報を入学直後から与え続ける。必要な模試の受験を促し、事前事後指導を継続することで、徐々にその気にさせる。1回や2回の講演会や集会で生徒をその気にさせることは出来ない。〈新潟県〉

＊

●目標を安易に下げないように、常に励ます。伸びたところを褒める。〈愛知県〉

＊

●現状よりも高い目標そのものを知らない場合も多いので、あらゆる機会を捉えて情報を提供するように心掛けている。例えば、国立大志望者は地元志向が強いが、関東の難関国立大にも目を向けさせたい。〈茨城県〉

＊

●目標は、上げることはあっても絶対下げてはならないと伝える。〈秋田県〉

＊

●なぜ勉強するのかを常々説く。高いレベルで努力してきた人の周りには高いレベルの人が集まる、良い出会いをしたければ自分がひたむきに努力する人になれと生徒に言っている。素敵な人に出会いたければ、自分が素敵な人になれと。「君の実力なら、○○大学に行かないともったいない」という言い方では生徒はなかなかその気にはならない。「君は、より高いレベルの環境に身をおくべき資質や能力を持っている！」と信じて真顔で説くことが重要だと思う。〈滋賀県〉

＊

●本校は推薦で勝負する生徒が多いので、AO入試で1ランク上の学校にチャレンジさせる。〈静岡県〉

＊

●高い目標を常に語り続けること。その意味で教員は勉強し続けなければいけない。〈福島県〉

A. 生徒に自信を付けさせる

A. 高い目標を語り続け、教師も勉強し続ける

＊

●具体的にどの教科のどのあたりを強化すれば生徒の力を一段階上げられるかを示してあげることだと考える。そして、高い目標にチャレンジすることでどのような効果があるかを示すことだと思う。〈兵庫県〉

＊

●授業でも定期考査でも、やや難しめな問題を提示し、現状に満足、安心させないように意識している。〈宮城県〉

＊

●「出来るかどうかはやってみないとわからない。高い目標がなければ進歩（学力向上）なし」と話す。〈広島県〉

＊

●現任校では、引っ張り上げて、更に背中を押してあげないとなかなか挑戦をしない。面談に時間をかけて、先輩たちの成功例を話したりして、自分にも出来るかもしれないと思わせるようにしている。そして、挑戦する気持ちが萎えないように、具体的な方策についても先輩の例などを紹介している。〈三重県〉

＊

●「頻繁な声掛け」これに尽きる。いつも見ていることを生徒に意識させるには、個別の声掛けが欠かせない。担任はもちろん、それぞれの立場でいろいろな場面を通して、高い意識を持たせる努力をすることが教員の使命の一つだと考えている。〈山形県〉

＊

●「模試を受ける前」の声掛けと「模試を受けた後」の声掛けが大切。特に結果返却に際しては、なるべく出来た教科にポイントを絞って褒め、気持ちよく勉強に向かわせる指導をしている。〈長野県〉

＊

●選択肢をどれだけ示してやれるかだと思う。全体での話も必要だが、それ以上に個々の生徒と話す時間を多く取り、その中でいろいろな選択肢を思い描かせることをさせたい。個々の教師が個別に話せる生徒数は限られているが、それぞれの教員で分担すれば数はどんどん増えていく。〈岡山県〉

＊

●好きなことは何？と問うことにしている。仮に「音楽」と返ってきたら、音楽に関連する仕事はいくらでもあること、その中で自分が得意なことは何か、それを生かせるのはどんな仕事か、そのためには何を学んだら良いかを考えさせている。〈山形県〉

＊

●興味のある分野のより高次な内容を示したり、大学での研究分野を紹介することなどを心掛けている。また高校の学習内容が、上級学校の学問や研究とどうつながるかを出来るだけ紹介するようにしている。〈愛知県〉

＊

●志を持った生徒を増やすため、授業で刺激を与える。〈福井県〉

＊

●生徒を揺さぶる言葉をたくさん持つこと。生徒は「言葉」で指導されており、教師は言葉を日常的に磨く必要がある。そして生徒に自分の思いを表現させること。最初は生徒もなかなか自分の言いたいことが言えず、教師や周りの大人が代弁してしまうことが結構あるが、最初は稚拙であっても自分の言葉で表現させることが大切で、そのときに、「待てるかどうか」が鍵になる。〈埼玉県〉

＊

●とにかく私が言い続けているのは「志」と「世のため人のため」。自分のことだけでなく、社会や他者への視点を持って生きていってほしいし、他者との共生を意識させたい。〈三重県〉

＊

●やはり「語り込み」が大切だ。そして「伝説の先輩」の話をしていくこと。先輩の成功談は、一番生徒のやる気を引き出すと思っている。また、そういう先輩を毎年育てていく営みも同時に大切なことだと思う。〈長崎県〉

A. 生徒を揺さぶる「言葉」と「待つ」姿勢

Column

高校教育と共に歩くベネッセコーポレーションの「現場」より

自律・自立の補助輪として

高校生商品開発部　統括責任者　**村上久乃**

ベネッセの通信教育講座「進研ゼミ」は、高校生が自律・自立していくための「補助輪」でありたい。高校生の学びと生活の中心はあくまでも学校と家庭ですが、それを「ナナメの関係」から支援したいと考えています。

例えば自学自習。高校生の多くは「自分で勉強できるようになりたい。それが本当の力だから」と言います。大学や社会では自力で学ばなければならないことは分かっているのです。でも、それを妨げる要因が多い。学習の途中でつまずく、友だちからのメールが来る、そもそも自分がどこから学習に取り組んで良いか分からないという声も聞きます。大学合格の倍率が下がっていることや、（座談会でも話題になりましたが）社会の暗い面ばかりが強調されることも学ぶ意欲を低下させる要因といえます。

そうした環境下で学びに向かう高校生のために私たちが出来ることを考えると、良質な教材をお届けすることはもちろん、学校での学びを受けて家庭で何を学べば良いのかという「学習の入り口」の提示や、学力の積み重ねが見えるようにしてやる気を持続させること、先輩の目から大学での学びの様子や社会での活躍ぶりなどを高校生に伝えることも出来るのではないでしょうか。「ナナメの関係」によって出来ることをこれからも考え続けていきたいと思います。

「生徒の心に火をつける」ことが出来る教材づくり

高校事業部　統括責任者　**福竹康志**

今回の座談会を通じて、改めて高校での教育活動の大切さを認識しました。企業の方々がお話しされていたように、「後になって分かることも多い各教科・科目の必要性」「心に刻まれた先生の言葉」など、高校3年間は社会に出てから必要な力の土台を培う重要な時期であると感じました。

進研模試をご提供している高校事業部は、先生方、生徒の皆さんが粘り強く努力された結果や状況を測定するアセスメントと、学びをサポートする教材を柱に学校現場をご支援してまいりました。今後は学校でのご指導にお役に立つ教材の充実に加え、生徒の心に火をつけることが出来るような教材やラインナップの充実に取り組んでいきます。

また、我々は全国9拠点から学校にご訪問をしております。全国への学校訪問は日々多くの気づきを我々に与えてくれます。地域・エリアという視点を更に大切にした情報・サービスをご提供していきたいと考えております。

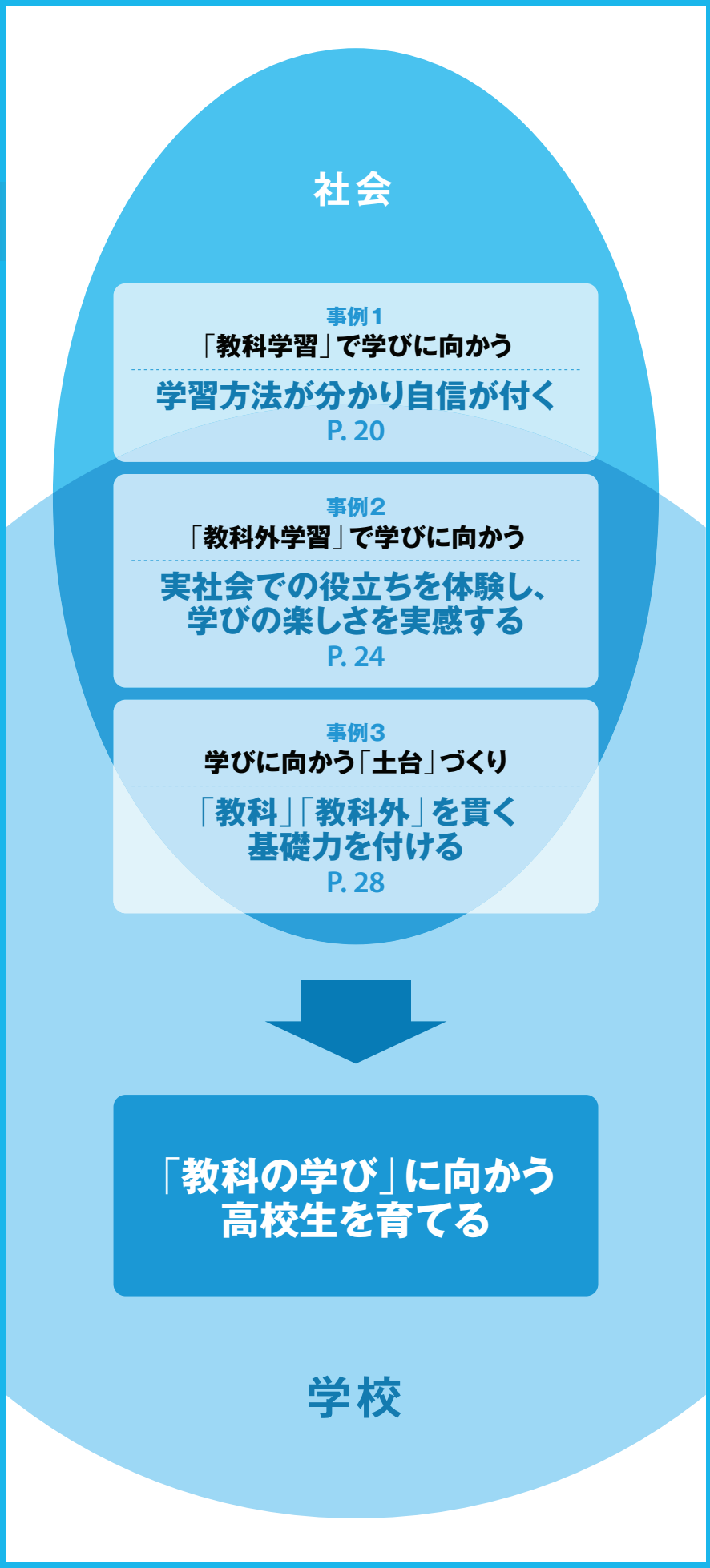
進研模試の実施を開始してもうすぐ50年になります。これからの社会に出て必要になる力を、生徒の皆さんに育んでいただけるよう引き続き努力いたします。今後ともご指導をよろしくお願いいたします。

学びに向かう
高校生を
いかに育てるか

第２部

「事例」編

学びに向かう高校生を育てるため、
学校と社会がどう連携できるのか。
その可能性について、三つの事例から考える。



事例 1

「教科学習」で学びに向かう

模試復習のサポートを通して「自立学習」の定着を促す

自立学習が身に付いてはじめて、生徒は大きく伸びていく。「進研模試復習イベント」を通して、生徒が自信を付け、学びに向かっていく過程を、近畿大学附属福岡高校の例を交えて紹介する。

「進研模試復習イベント」の概要

九州大を中心とした大学生の指導を受けながら、進研模試の復習をする勉強会。模試でつまずいた問題や類題の解法から日頃の学習法、進路に関することまで幅広く質問できる。

実施時期／年間3回、進研模試の答案や帳票が返却される翌月に開催（2010年度は8月、12月、3月を予定）
会場／九州大箱崎キャンパス
対象／「進研模試」を受験した高校1年生
教科／数学・英語
定員／先着200名（事前予約制）
参加費／無料

イベントの流れ

模試復習法ミニ講義
ベネッセコーポレーションの講師が模試の復習の重要性や、効果的な復習のコツなどを講義。
約10分

模試復習TIME（数学・英語）
模試でつまずいた問題や類題に取り組む。会場内にいる九州大などの大学生50名に自由に質問できる。
約2時間

提出課題取り組みTIME
「進研ゼミ」の提出課題をためている生徒がその場で取り組んで提出する（「進研ゼミ」会員限定。会員以外は模試復習を継続）。
約30分

進路&学習法質問TIME
当日に配布する「先輩プロフィール&アドバイスシート」を参考に、希望する大学生に学習法や大学生活・研究内容などについて質問できる。
約30分

『場』『教材』『指導』の三方向からのアプローチ

大学生講師が「分からない」を「分かるかも」に変える

模試は、学習成果を振り返り、弱点を把握するのに適した教材だ。しかし、模試受験後の学習は生徒個々に委ねられるケースがあり、模試を学力向上に生かせるかどうかは、個人差が大きいのが実状だ。

ベネッセコーポレーションでは、2008年度より九州大から教室を借り、「進研模試復習イベント」を実施している。イベントに参加した生徒からは、模試活用の課題として「宿題や予習に追われて時間がない」「一人では集中できない」など、復習したいが十分に出来ていないことを自覚する声が多く聞かれた。

イベントの目的は、単なる復習ではなく、自立学習の定着だ。そのため、『場』『指導』『教材』の三方向からアプローチしている。

まず『場』についてだが、イベント会場となる九州大は、九州地区の多くの高校生にとって「憧れ」の地である。参加者へのアンケートでは、「九州大に来てみたかった」という声も多い。このキャンパスの大教室で、他校のライバルたちと机を並べて切磋琢磨することによって受

ける刺激は大きい。将来の大学生活を具体的にイメージし、受験へのモチベーションが高まる効果もある。

次に『指導』だが、会場には50名の大学生講師が巡回しており、生徒に質問があれば挙手して個別指導が受けられる。講師が特に心掛けるのが、高校生の考え方に寄り添った指導だ。事前にグループディスカッションを行い、高校生がつまずきやすい箇所や予想される質問などを検討。当日は、「どの段階で分からなくなったのか」などを丁寧に聞き出し、一緒に考えていくことで、生徒の「分からない」という気持ちを「分かるかもしれない」に変えていく。

三つ目に『教材』についてだが、イベントでは、類題演習が重視される。模試の問題を解き直すだけでなく、応用力や背景知識の獲得へと発展させるためだ。しかし、「何が分からないのかが分からない」「分からないことが多すぎる」といった悩みを持つ生徒が、自分で類題を探すのは難しい。逆にいえば、類題を特定する作業そのものが弱点を自覚する力を育て、自立学習に結び付く。そこでイベントでは「進研ゼミ高校講座」を教材として用い、類題を解くことが効果的な復習になることを体験させていく。

参加者の中で進研ゼミの会員には、進研ゼミ高校講座のどの問題が、模試の各小問の類題であるかを示した冊子が配られる（**図1**）。また、類題を丁寧な解説と共にまとめた「模試復習サポートBook」が全員に配られる（**図2**）。

単なる復習に終わらず「自立学習」の定着を促す

更に生徒の自立学習の定着を促すために背景となる知識や、学習への動機づけを含めた大学生講師ならではの指導が行われる。例えば、数学では解法に加えて、生徒の到達度や課題に応じて、ケアレスミスの防ぎ方や暗記すべき公式などを教える。英語は解法よりも、日頃の学習法を指導することが多い。長文読解が苦手な場合、生徒と話しながら「長文を読み慣れていない」「文法が弱い」など、弱点を見極めて対策を教える。

イベントの最後には、学習の進め方や進路について質問する時間も設けている。事前に講師の所属大学や学部、お勧め学習法などをまとめた資料が配られ、生徒は希望する講師から自由に話を聴く。「部活の合間を縫って勉強するには」などの質問に、講師は家庭での自立学習につなげることを意識して答える。

昨年度3月のイベントの事後アンケートでは、「満足した」が99％を占め、「大学生が親切に教えてくれた」（84％）「教材が分かりやすかった」（48％）「今まで分からなかった問題が分かるようになった」（45％）と答える生徒が特に多かった。フリーアンサーで寄せられた「帰宅後、同じような問題に取り組んでみたい」「難問に挑戦する意欲がわいた」といった声は、生徒の中に自立学習へと向かう気持ちの芽生えがあったことを示唆している。

図1 模試復習得Book

「進研ゼミ高校講座」のどこに類題が掲載されているかを示す対応表

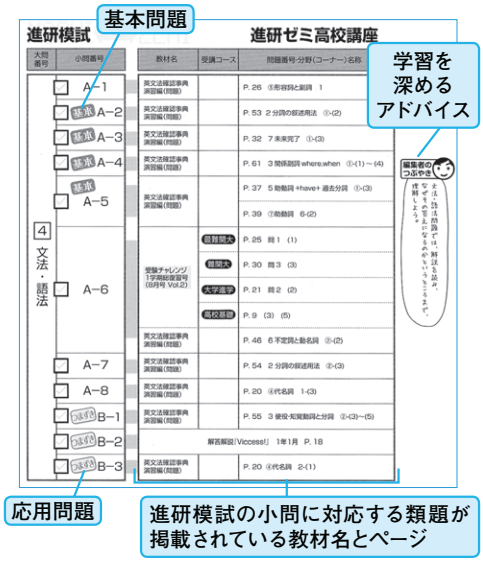
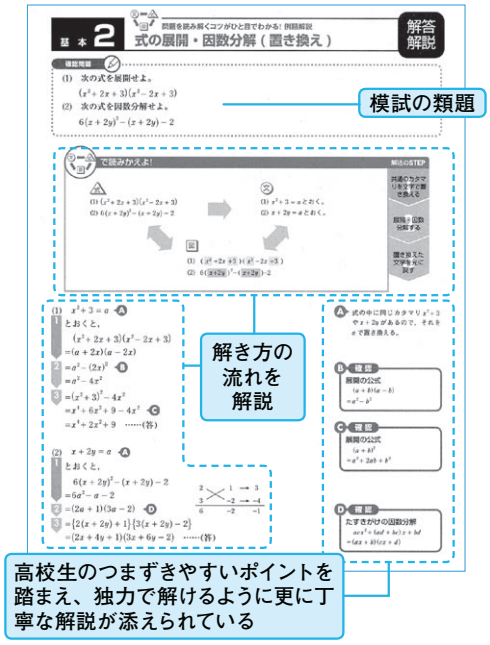


図2 模試復習サポートBook

小問に対応する類題がまとめられた冊子



ケース

福岡県・私立近畿大学附属福岡高校

模試復習で上位層・中下位層の双方の生徒が変化

授業と模試をリンクさせて学習意欲を高める

近畿大学附属福岡高校が抱える課題は、中下位層の学力の底上げだ。上位層が意欲的に学習に取り組むのに対し、中下位層は学習に自信を持てない生徒が多く、教師が目を離せば学力差はすぐに広がる。同校でも、授業を通して生徒の自信を取り戻そうとしてきた。例えば、数学担当の武田信也先生は、毎授業後、その日の復習問題を宿題に課している。

「ほとんどの生徒が提出しますが、中下位層の生徒は、やらないと叱られるという気持ちも半分といった感じで、必ずしも前向きな姿勢で取り組んではいません。放課後や長期休暇を利用した補習も各教科で頻繁に実施していますが、これらは自ら学ぶ意欲が生徒にあってこそ、より大きな効果を発揮するものです」

模試復習の指導は、多くの高校同様、教師によって異なる。武田先生の場合、模試直後の授業で問題を解説したり、当日に解答用紙を配布して家で取り組ませたり、記憶が新しいうちの指導を心掛けている。

「答案や帳票が渡される1か月後には問題を忘れており、偏差値だけを見て終わり、という生徒が多い。しかし模試の直後、『この問題は、授業で学んだことを少し応用しただけだ』と解説すると、『もう少し考えれば分かったのに』『やはり授業は大切だ』と、前向きな気持ちが生まれやすくなります」（武田先生）

授業と模試がリンクしていると感じさせれば、日々の学習意欲も向上する。ただ、クラス全体に対する解説では、中下位層の一人ひとりをフォローするのは困難だ。そのため同校では長期休暇中、模試の基礎問題のみ、全問正解するまで繰り返し取り組ませる補習も行っている。

すべての学力層の生徒が模試復習で刺激を受ける

同校は、10年3月に実施された進研模試復習イベントに、希望者を参加させた。高校周辺は自然豊かな環境で、おっとりとした生徒が多く、都会の雰囲気に慣れさせたいという思いがあった。進路指導部長の石田伸先生はこう説明する。

「センター試験で初めて大学の大教室に入るのでは緊張してしまいます。更に県内外の高校生と共に学ぶ

近畿大学附属福岡高校
進路指導部長
石田 伸
Ishida Shin

近畿大学附属福岡高校
数学担当、進路指導部
武田信也
Takeda Shinya

近畿大学附属福岡高校
3学年担任
飯干正敏
Iiboshi Masatoshi

高校と協同開発中

生徒の自立学習を支援する「校内学習サポートプログラム（仮称）」

高校入学までの学習環境の変化により、「難関大志望者であっても独力で学習を進めるのが難しくなっている」など、生徒の自立的な学習力の低下を指摘する声は多い。そのような状況を受けて、09年より一部の高校とベネッセコーポレーションが協同で開発に取り組んでいるのが、課外補習の時間を活用した「校内学習サポートプログラム（仮称）」である。

このプログラムの特徴は、高校との対話から、その高校の課題に合った課外学習プログラムを提供する点にある。進研模試の結果から生徒の学力を分析し、目標となる学力を身に付けるための学習について高校とベネッセが話し合う。そして、難関大合格など、設定した目標に向けて体系的なカリキュラムと教材を設計し、特別補習として生徒に提供する。

ただし、テキストを与えるだけで生徒を学習に向かわせるのは難しい。生徒を動機づけ、学びに向かう手助けを行うコミュニケーション機能が、このプログラムには必要だと考えている。

例えば、ある高校では、生徒自身が学習上の課題に向き合い、自立的な学習者となるためのグループワークを実施した。コーチ役の大学生を交え、苦手科目について生徒同士が「なぜ苦手なのか、どうすれば克服できるか」を話し合い、学習計画を立てていく。生徒は同じ高校生のさまざまな視

機会は、生徒にとって良い刺激になると期待しました」

生徒に参加を勧めた飯干正敏先生は、特に下位層の生徒の変化を期待したという。

「下位層には、『頑張らなければ』と焦りを感じながらも、なかなか学習に身が入らずに悩んでいる生徒が少なくありません。年齢が近い大学生から教えられる経験によって何かが変わってくれればと考えました」

参加した生徒の動機は、「九州大を見てみたい」「大学生に勉強や学習法を教えてもらいたい」などが目立った。武田先生は生徒の様子を次のように説明する。

「参加を勧めると生徒はすぐに準備を始め、想定した以上にイベントへの参加意欲が高まりました」

イベントでは多くの生徒が大学生に積極的に質問し、漠然としていた進路が具体化するきっかけになったようだ。気持ちの変化に伴い、受験勉強に本腰を入れ始めた生徒も多いという。

「九州大や他校の生徒から刺激を受けて帰ってきたのは期待通りでしたが、それ以上に収穫だったのは、大学生への憧れを口にするようになり、具体的な学習方法にも改善が見られたことです」（武田先生）

今後も授業、そして模試の活用などを通じて、全体の学力向上を図る方針だ。

「まずは、一人ひとりに、『やれば出来る』という自信を根付かせるのが先決。そのためには一つひとつの授業を大切にして教師と生徒の信頼関係を強化していく必要がありますし、外部の刺激が有効に働くこともあると考えています」（石田先生）

参加した生徒の反応

- 大学生は年齢が近くて話しやすかった。『先生には、今更、こんなことを聞けないな』ということも遠慮なく質問できた
- 英語が苦手と相談したら、『単語から復習を始めてみては』とアドバイスされた。復習した単語が早速定期テストに出題され、『もっとやってみよう』という気持ちが強まった
- どうすれば計算ミスを減らせるかを質問し、小まめに確認しながら解き進めると良いことを教えられた。今後、心掛けようと思う
- 九州大キャンパスを歩き、九州大生と話して、進路が具体的にイメージできた。夢が近づいたと感じる
- 九州大生の指導がとても分かりやすく、『努力をしてきた人たちなんだな』と感心した

ベネッセコーポレーション担当者より

模試復習支援から、日々の学習支援を目指して

高校教育事業ドメイン 九州支社
地域戦略課
河野 巧

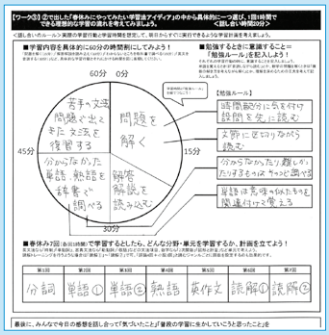
進研模試復習イベントは、高校生の自立学習の育成を支援することを目的にスタートしました。「教材」「九州大という場」「大学生からの指導」により、生徒の自立学習支援に一定の効果があることも分かってきました。その一方で、参加できなかった多くの生徒に対する自立学習支援を課題と考えています。この解決には、「場」の拡大が必要ですが、場と人双方の課題が山積しており、現状では実現は困難です。

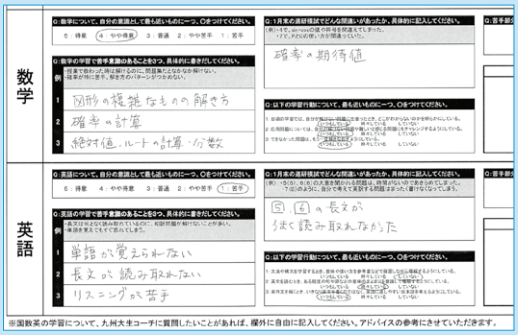
そこで今後の展望として、模試復習イベントで用いる教材を出来るだけ多くの生徒に提供できる方法を、九州・沖縄地区では検討したいと考えています。更に模試復習だけでなく、日常の家庭学習における自立学習へと支援を拡大させることも考えられます。

一つの可能性としては、「場」に捉われず、弊社情報誌やWEBなどの活用を視野に入れ、大学生と高校生が学びを通して直接コミュニケーションを取れる機会を、日常のちょっとしたタイミングに提供する仕組みづくりが考えられます。今後も先生方をはじめ、多くの方々からご意見をいただけると幸いです。

点を学びながら、大学生の体験談を聞き、自分の学習習慣の改善に具体的に取り組むことになる。

今後、学習成果などの検証を行いながら、より課題解決力の高いプログラムを開発していく予定だ。目標に向かって自立的に伸びていく生徒を育てるプログラム。ベネッセコーポレーションは、高校の先生方と協力して作り上げる新しい課外指導の形を、引き続き模索していく。





ワークショップで使用するワークシート例。グループで学習上の課題を話し合い、コーチ役の大学生のヒントなどを基に、自分に合った学習計画を練り上げていく

＊実際の生徒の記入を参考に、編集部にて作成

事例２
「教科外学習」で学びに向かう

実社会とつながる体験型学習で生徒が「学ぶ楽しさ」を実感する

マイクロソフトとベネッセコーポレーションが協同開発した「ロボット講座」から、企業と高校の連携を通して、実社会に役立つ学びについて考える。

講座の概要

「ロボットを作ろう、動かそう～四足歩行ロボットで体感する、未来の情報社会～」

マイクロソフトとベネッセコーポレーションが協同で開発した中高生向けの体験型講座。理数系への興味・関心の喚起やテクノロジースキルの習得、コミュニケーション能力の育成などを目的とする。

本講座はさまざまな学部・学科で学ぶ大学生・大学院生が講師となり、3人1組の生徒チームによる実習形式で進められる。チーム内でアイデアを出し合い、ロボットを組み立て、動き方をプログラミングし、他チームのロボットとスピードや動き、装飾性などを競う。更に、作ったロボットを紹介するプレゼンテーションの場が設けられるほか、毎年1回、講座実施校の生徒が全国から集うコンテストも開かれる。

プログラムは、1日、2日間、通年など、各校のカリキュラムに応じて柔軟に組み立てられる。

ケース1 埼玉県・私立西武学園文理中学・高校

「正解主義」からの脱却で自由なコミュニケーションが生まれる

面と向かって考えを伝えられる生徒を育てたい

西武学園文理中学・高校が高校理数科に体験型講座「ロボットを作ろう、動かそう」（以下、ロボット講座）を導入した背景には、コミュニケーションにかかわる生徒の変化があった。谷川雅子先生は当時、強い問題意識を持っていたという。

「最近の生徒は、『出る杭は打たれる』という気持ちが強いようです。当たり障りのない会話をするだけで、生徒同士でもなかなか人間関係が深まらない。私との面談で一言も話そうとしない生徒に困らされることもあり、面と向かって考えや気持ちを伝えられる生徒を育てたいと感じていました」

理数科としての特色を打ち出したいという考えもあったと、村山高志先生は説明する。

「授業にはない体験を通して、理系の面白さや学ぶ意味を実感させられる活動を模索していた頃に、このロボット講座を知りました。ものづくりなどの第一線で働く人たちとの交流により、自分自身の将来の職業イメージがわき、そこから主体的な学習姿勢が身に付いていくのではないかと期待しました」

導入当初は「まずはやれることか

西武学園文理中学・高校
進路指導主任
佐野和之
Sano Kazuyuki

西武学園文理中学・高校
2学年担任
村山高志
Murayama Takashi

西武学園文理中学・高校
3学年担任
谷川雅子
Tanigawa Masako

らやってみよう」という軽い気持ちでのスタートだったという。

あえて困難に直面させて自発性を引き出す

1・2年次の「総合的な学習の時間」を「先端科学講座」という名称にし、1年次の9月から1年間にわたり、週1回、ロボット講座に充てた（1年次14コマ程度、2年次9コマ程度）。カリキュラムの詳細は、企業から提供されたプログラムを基に校内で検討した。佐野和之先生が狙いを説明する。

「生徒の実態を踏まえ、育てたい生徒像を意識して内容を練り上げました。そこには教師が熱意を持って活動に入り込まなければ、生徒もついてこないという考えもありました」

パソコンを使ったプログラミングもチームワーク。ロボットを動かすアイデアを出し合い、思い通りの動きが出来るまでチームで試行錯誤する

活動の中で特に意識するのが、「ハイレベルなインプット」「右往左往させる時間」「緊張感の中でのアウトプット」の三つだ。インプットでは精巧なロボットを見せて、企業でも使われるプログラムで動くことを伝え、「自分たちはすごいものをつくる」という意識を持たせる。これにより興味・関心を高め、明確なゴールイメージを持たせる。

作業がスタートしたら、教師が細かく指導しないことを心掛ける。困難に直面して「右往左往」する体験から、「他のチームはどうしているのか」「友だちに相談してみよう」「講師からアドバイスをもらおう」といった発想が生まれてくるからだ。

「基本的に教師は口を出さず、やりたいようにやらせます。生徒はその態度を感じ取ると、『先生には頼れないぞ』と考え、目の色を変えて取り組み始めるのです」（村山先生）

そして高いモチベーションを維持させるために、アウトプットの場を設定する。校内での発表会を設けて

連携企業

マイクロソフトはこう考える

企業の声

「情熱」の大切さを生徒に教えられた

アカデミックテクノロジー推進部 部長
伊藤信博
アカデミックテクノロジー推進部
矢岡明倫

マイクロソフトは、「企業市民活動」の一環として本講座の開発と展開に取り組んでいる。本講座のロボット製作やプログラミングを通じて、中高生の「可能性」が最大限に引き出されることを目指している。

「日本の産業界の発展を考えると、イノベーションを起こせる若い人材の育成が欠かせません。教育現場に我々の持つコンテンツや技術を提供することで、若いうちに自身の可能性に気づき、夢を持ってもらう手伝いをしたいと考えています」（伊藤氏）

テーマにロボットを選んだのは、中高生が興味を持ちやすいことに加え、理数系離れに対する問題意識がある。機械工学や情報科学への興味を高め、理数系人材の育成につなげたい考えだ。

ロボットの組み立てというハード面、プログラムというソフト面の組み合わせによって学びの幅が広がりやすいことも理由の一つだ。そこにチームによる体験学習を取り入れて、学びの効果を高めている。具体的には、どのような力が育つのか。

「三つの基礎力の育成を目指します。新しいアイデアを考える力、自分の考えを伝えるコミュニケーション能力、そして皆で協力して問題を解決するチームワークです。いずれも、社会に出てから必要とされる力と考えています」（伊藤氏）

矢岡氏は、多くの場面で生徒の可能性の大きさに驚かされたと語る。

「『ロボットを動かす』『速く走らせる』など、明確なゴールが共有されているためか、生徒間の話し合いが活発で、次々に新しいアイデアが生まれます。プログラミング自体は決して複雑ではありませんが、工夫によって私たちが想像していなかったものが出来上がることもあります。『情熱』を持って取り組むことの大切さを教えられた気がします」

教師とのコラボレーションを通して学ぶことも少なくない。

「最初に答えを提示せず、時間をかけて生徒自身に見つけさせる。先生方にとっては当たり前のことかもしれませんが、効率性重視のビジネスの現場ではしばしば忘れられています。人を育てる難しさと大切さを改めて感じました」（伊藤氏）

今後の日本の産業界を考えた時、教育現場に求めることとしては、「学び続ける姿勢」の育成を挙げる。

「ロボット講座のような体験を通して、学ぶ楽しさを実感し、挑戦することで学ぶ姿勢が育つ面も大きいと思います。生徒が学び続ける『燃料』を与える上で、企業にサポートできることもありますので、いつでも声を掛けていただきたいと思います。そして共に若い人材の可能性を広げていきたいと考えています」（矢岡氏）

いる他、文化祭やオープンスクール、学校説明会などで、中学生や保護者に対し、ロボットの実演や講座内容のプレゼンテーションを行う。

ロボット講座の実施校の代表チームが集まるコンテストの存在も、重要なアウトプットの場となる。校外の人に注目されることで、「何とか完成させなければ」という緊張感が生まれる。

図 先端科学講座「ロボットを作ろう、動かそう」カリキュラム

1年生							2年生					
9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
四足歩行ロボット製作 1. ロボット組み立て（2コマ） 2. Visual Basic 入門（2コマ） 3. ロボット動作プログラミング（5コマ） 4. プレゼン準備（1コマ） 5. 最終調整（1コマ） 6. 学内コンペ（3コマ）						合同発表会 ベネッセ マイクロソフト	ロボット自由製作 1. ロボット解体（1コマ） 2. ロボットのコンセプト作り（2コマ） 3. ロボット組み立て、プログラミング（4コマ） 4. プレゼン準備 5. クラス内プレゼン（2コマ）					文化祭 ・ロボットレース ・見学者にロボットを動かしてもらう （・理数科紹介のプレゼン）

学校資料を基に編集部が作成した年間の大まかな予定。2年生ではロボットを製作するグループの他に、並行して理数科紹介のプレゼンテーション資料を作成するグループもある

チーム内で意見を主張し合いコミュニケーション能力が向上

講座が進むに従って、チーム内やチーム間でのコミュニケーションが明らかに活発になっていった。

男女混成の3人チームは、くじ引きで決める。接点の少ない生徒を同じチームにして、多様なコミュニケーションを生み出すためだ。最初はよそよそしい関係も見られたが、3人でロボット1台を製作する中で次第に意見を交わすようになった。

「『こうしたらいいと思う』『こっちの方が良さそうだ』と主張し合うなど普段は見られない姿に、うれしい驚きがありました。時には衝突しながらも、自分の意見を通すには相手の意見も聞く必要があることなど、コミュニケーションについて経験的に学んだようです」（谷川先生）

コミュニケーションが活性化した要因として、「正解主義」からの脱却を教師たちは挙げる。目標が高いからこそ、途中段階でみな失敗を繰り返す。しかし、原因を検討して改善する過程を通して「失敗しても原因を考えればいい」と考え、「正しいことを言わなければいけない」という思い込みから抜け出したのだ。

学びの姿勢にもプラスの効果が表れている。アンケートでは8割の生徒が「もっと知りたい」「出来なかったことを出来るようになりたい」と答えるなど、「知識への渇望感」（佐野先生）が明らかに高まった。「もっと数学や物理を学びたい」という生徒も多い他、「プレゼンで語彙力のなさを痛感して国語を学ぶことの重要さに気づいた」など、教科学習への意欲を示し、自分から質問する生徒が増えるなど、コミュニケーションの部分でも変化があった。

教師の意識も変わっていった。

「最初は生徒主体で上手くいくか不安でしたが、教師が辛抱強く待てば、生徒は必ず期待に応えてくれました。生徒を信じることの大切さに改めて気づきました」（谷川先生）

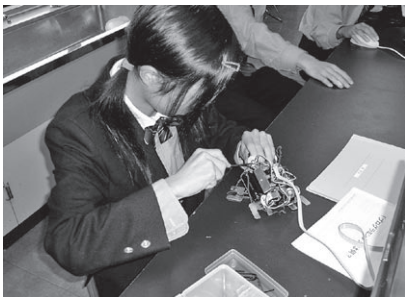
他の授業とは、リーダー役を務める生徒が異なることも意外だった。

「勉強が出来る生徒よりも、失敗を恐れない積極的な性格の生徒が生き生きと指示を出す姿が印象的で、普段から多様な評価軸を持つことが必要だと痛感しました」（佐野先生）

コンテストで総合優勝したチームの生徒は、「勉強では目立たないけれど、活躍できてうれしかった。新しい自分を見つけられた」と話す。

8割の生徒がロボット講座を通じて「クラスや学校が好きになった」と回答したのも驚きだったようだ。また、新入生の中に、学校説明会でのロボット講座がきっかけで入学を希望した生徒がいるなど、生徒募集にも好影響が出ている。

「コミュニケーションの大切さを実感し、他者理解や自己肯定感が向上したと思います。成果は期待以上でした。今後も校外に視野を広げ、社会と連携した授業をつくりたいです」（佐野先生）



ドライバーで小さなネジを扱うのは一苦労。しかし、その苦労がのちに大きな達成感へと変わる

ケース2

静岡県立伊豆総合高校

「成功に向かうイメージ」を体感し学びへの姿勢が大きく変化

興味から生まれた目標だから失敗することすら「楽しい」

静岡県立伊豆総合高校は、普通科の大仁高校と修善寺工業高校が統合し、2010年度に新設した高校だ。09年度、新しい学校づくりの計画を進めていた中で、大仁高校で2日間のロボット講座を実施。3学年で48人の希望者が参加した。

教師は講座の内容が「難しすぎるかもしれない」という不安を抱いたが、すぐに杞憂だと分かった。高木ゆかり先生が振り返る。

「勉強ではすぐにあきらめて下を向く生徒も、この時は講師や友人にサポートを求めるなど、解決に向けて自分で動いていました」

ロボットへの興味と、「完成させたい」というモチベーションが生徒を動かしたと教師たちは考える。

チームで協力して考え、チャレンジし、結果を踏まえて検討を深める。このプロセスが短い時間で繰り返されるため、生徒は最後まで興味を失わずに取り組んだ。失敗することも「楽しい」と感じられたようだ。神戸美穂先生が話す。

「予想と異なる動きをした場合も落ち込まず、逆に失敗を発展させて新しい動きを生み出すなど、遊び心を持って取り組んでいました」

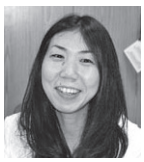
普段のグループ学習では、1人が進めて他の生徒が聞き役に回ることが多いというが、ロボット講座では自然に役割分担をして皆が高め合う姿が見られた。

事後アンケートでは、「動いた時には感動した」「集中力が高まった」「チームで協力する大切さが分かった」といった声が寄せられた。

10年3月、東京大で行われたコンテストのプレゼンテーション部門で、同校のチームはテレビショッピングを模したユニークなプレゼンテーションを行い、見事、優勝を収めた。

「講座を通じて、生徒の思いがけない才能に気づきました。教師として、生徒が出来るまで信じてあげて、待ってあげることの大切さを感じました」（高木先生）

静岡県立伊豆総合高校
2学年主任
高木ゆかり
Takagi Yukari



静岡県立伊豆総合高校
2学年担任
神戸美穂
Kanbe Miho

「絶対にコンテストで優勝する！」と宣言し、生徒は自分たちでプレゼンテーションの内容を考え、放課後も練習した。頑張れば出来ることを、生徒から学んだと、同校の教師は振り返る

ベネッセコーポレーション担当者より

生徒の意欲が高まる体験学習とは

高校教育事業ドメイン 経営企画室
小村俊平

学校で教科の学習意欲を高める方法を、「教科そのものの面白さを伝える」「教科が実社会に役立つことを伝える」という二通りで考えた場合、企業と連携して出来るのは後者です。

例えば、ロボット製作は機械工学を学ぶ機会になりますが、関節や骨組みを考える上では生物学の知識も重要です。動作プログラミングでは数学や英語の重要性に、装飾やプレゼンテーション資料作りでは美術・デザインの大切さに気づきます。このように「学校で学んでいることが役立つ」という実感は、生徒の学ぶ意欲を高めます。

理系・文系を問わず、どんな生徒でも学べることも大切です。ロボットに興味がない生徒が「やってみたら面白かった」と思えるような楽しみがあること。最初から興味がある生徒に対しては、チームで協力したり、大勢の前で発表する機会を持つことが重要です。高校生の時こそ「好きなこと」だけでなく、「経験がないこと」「興味がないこと」にも取り組んで、視野を広げることが大切ではないでしょうか。

ロボットという題材を通じて、生徒には学び続ける喜びを実感してもらいたいと考えています。

事例３
学びに向かう「土台」づくり

自ら学び、考える力を育てるために――「語彙・読解力検定」開始

2011年、朝日新聞社とベネッセコーポレーションが共同事業「語彙・読解力検定」をスタートさせる。学力の基礎である語彙力、読解力を高校や大学は今どのように捉えているのか。検定概要と共に紹介する。

学校で培うべき力と社会で必要な力を総合的に測る

思考力や判断力、表現力の向上が目標

生徒の読解力や表現力の低下を指摘する学校現場の声は多い。「OECD生徒の学習到達度調査（PISA）」でも、日本の子どもの読解力低下の傾向が明らかになっている。

このような中、新学習指導要領では、国語だけでなく各教科で「言語活動の充実」がうたわれ、語彙を豊かにし、思考力や判断力、表現力を高めることがすべての教育段階で重視されている。また、中学3年の国語では「論説や報道などに盛り込まれた情報を比較して読む」など、「新聞や雑誌の活用」が「言語活動」の例として盛り込まれている。

語彙問題と、新聞の記事を使用した読解問題で構成された「語彙・読解力検定」は、語彙の知識だけでなく、語彙の運用力や読解力をあわせて測定することで、課題を明らかにし、思考力や判断力、表現力を高めることにつなげたいと考えている。

学校で培われるべき力、社会で必要とされる力を総合的に評価できる検定試験となるよう、2011年の実施に向けて開発が進められている。

「語彙・読解力検定」の概要

＊いずれも予定です

名称／語彙・読解力検定
開始時期／2011年 検定試験開始（予定）
実施時期／年間2回（6月・11月）
対象／小学生～社会人まで対応
11年は、高校生・大学生レベルからスタート
出題領域／
❶辞書語彙：国語辞典に掲載されている語句・ことわざ・四字熟語・慣用句・故事成語などの意味や用法を出題。社会生活の中で使用される一般的な語句の知識を確認する。
❷新聞語彙：朝日新聞に掲載されている用語を、「社会」「科学技術」「医療・生活」「文化」の四つの分野から出題。新聞を読む上で必要な語について、基本的な語（繰り返し登場する語）と時事的な語（その時々のニュースを読むのに必要な語）の二つの観点から知識を確認。
❸読解力：朝日新聞の「天声人語」や社説、コラムなどを使った読解問題を出題。文中の語句の意味を問う問題を中心に、部分的な理解、全体的な理解を確認する問題も出題し、総合的な読解力を測定する。
検定の設計／学習指導要領には準拠しないカリキュラムフリー設計。各級ごとに試験を行い合否を判定。

対象者	等級	到達イメージ
社会人 大学生	1級	趣味・教養、企業研修
	準1級	就職、大学教養修了
高校生		難関大学受験
	2級	一般大学受験、高校卒業
	準2級	高校段階の学習レベル
中学生 小学生	3級	高校受験、中学卒業
	4級	中学段階の学習レベル
	5級	小学段階の学習レベル

＊級設定など詳細は予備実査の分析結果から設定

「語彙・読解力検定」問題イメージ（2級相当）

Ⅰ：語彙問題

問1　次の語句の意味として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

「入念」

① 忘れないでおくこと
② 信仰の道に入ること
③ 心の中で唱えること
④ 細かい点まで注意すること
⑤ 一つのことを思いつめ悩むこと

問2　次の意味を表す語句として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

「目的を遂げるために大変な労苦に耐えること」

① 堅忍不抜
② 苦心惨憺
③ 臥薪嘗胆
④ 捲土重来
⑤ 孤軍奮闘

問3　次の語句の用例として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

「すずなり」

① 朝からすずなりの電話で、仕事が手につかない。
② 話題作を見ようと、映画館にはすずなりの客が駆けつけた。
③ 手帳を見ると、来月は予定がすずなりだ。
④ 大学図書館には、本がすずなりに並んでいる。
⑤ 9月も半ばになって、ようやく風もすずなりになった。

答え　問1④　問2③　問3②

Ⅱ：読解問題

2009年10月12日付朝刊天声人語から

読者からいただく封書に、筆でしたためたものがある。広げつつ A 墨跡を追えば、ご用件にかかわらず背筋が伸びる。いわば正装の来客。寝ころんで接するわけにはいかない。和紙には、触れる者の居ずまいを正す力が宿るらしい。東京・王子の紙の博物館で、企画展「手漉（す）き和紙の今」を見た（11月29日まで）。人間国宝3氏の作も端正ながら、いろんな原料と技法で伝わる郷土紙がいい。和紙とひとくくりにするのがためらわれる彩りだ。展示の紙々は、近く発刊される「和紙総鑑（そうかん）」12巻の一部という。京都などの有志が、10年がかりで各地の1070点を集め、和英の解説を付した見本帳である。来春にも800部が市販される。一説によると来年は、紙すきの技が大陸から伝わって1400年にあたる。以来、和紙は書画の世界ばかりか、住まいにもなじんだ。戸外の光や音、寒暑を、通すでもなく遮るでもない。障子が持つあいまいさ、しなやかさこそ、自然との「和の間合い」だろう。古川柳に〈薄墨の竹を障子に月がかき〉がある。おそらくは美濃紙（みのがみ）の、薄いカンバスに揺れる竹林の淡彩。素材として、また媒体として日本文化を担ってきた和紙の見せどころである。洋紙の世にあって、なお千種を超す紙が全国に息づくのもうなずける。博物館で、はがきの手作りを体験した。もみじを3枚すき込み、透かしを入れ、郵便番号の赤枠をスタンプで押したら、B 素人の戯れとは思えぬ一 [C] に仕上がった。この見ばえも和紙のマジックであろう。いつか礼状に使わせてもらう。

問1　下線部A「墨跡を追えば」の文脈上の意味として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、番号で答えなさい。

① 書かれた意図を思うと
② 書かれた筆跡を見ると
③ 書かれた内容の真偽を考えると
④ 書いた人の消息を尋ねると
⑤ 書いた人の思いを察すると

問2　下線部B「素人の戯れ」とはどういうことですか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、番号で答えなさい。

① 理念も思想もない者のいい加減な行為
② 体験や経験に劣る者の恐れを知らない行為
③ 経験や知識が浅い者の気楽な行為
④ 教えを請う者のいない自己満足の行為
⑤ 物事に精通せず大局を知らない者の行為

問3　空欄Cに当てはまる語として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、番号で答えなさい。

① 葉
② 節
③ 枝
④ 冊
⑤ 本

答え　問1②　問2③　問3①

朝日新聞社担当者より

「考える」土台を鍛え 次代を担う人材を育成

社長室　教育事業センター
根岸佳代

PISA型学力の低下など、日本の子どもたちの学力不足が懸念されています。一方、大学生は社会から「社会人基礎力」や「学士力」など、非常に高度な力を要求されています。私はそれらを高めていく基礎は自分の頭で「考えること」だと思っています。そして、「考える」行為には、語彙が必要です。語彙が豊富に、高度になれば、思考も複雑になるでしょう。読解は、論理的思考をする際の訓練になり、読解で得た知識は更に思考を助けます。

インターネットの普及などで世の中に「情報」があふれる今、必要なのは玉石混交の「情報」を取捨選択していく力です。また社会人になると、多くの文献や情報を使って自分の考えをまとめ、相手に理解してもらわなければなりません。学力だけでなく、言語能力を鍛えていくことは、今後社会で必要とされる能力を身に付ける第一歩となるはずです。

子どもたちは、次代の日本社会を背負う人材です。子どもたちが豊かな思考で自ら考え、一人ひとりがより素晴らしい人材に育っていくことが、次の日本をつくっていくことに他ならないと考えています。

ベネッセコーポレーション担当者より

「学び、知る楽しさ」に 生徒が気づく検定

高校教育事業ドメイン　経営企画室
高田貴史

近年、全国の先生方から「生徒の語彙力が低下している」との声を伺うことが多くなりました。特に、教科の専門用語などではなく、教科書に出てくる日常的な語彙でつまずく生徒が多く、それが先生の指導の負担を大きくしているようです。また、言葉は知っていても、文脈の中でその言葉がどのような意味で使われているのかを問うと、とたんに答えに迷う生徒が増えると伺っています。単純に言葉の意味を知っているだけでは真の学力とは言えません。

教科学力の土台となる語彙力と、文章の中で適切に使い分ける、言わば語彙の運用能力を、本検定を活用することで身に付けてもらいたいと思います。

語彙力、読解力は幅広い世代の人々の考えを理解するための土台となり、コミュニケーションの幅を広げることにもつながります。本検定をきっかけに、生徒が学ぶ楽しさ、知る楽しさに目覚めて、新聞や本を自主的に読むようになってくれればと考えています。

日々の授業に主体的に臨む生徒を、一人でも増やせるよう本検定を開発していきます。

高校現場はこう考える

高校生の語彙力、読解力の現状と、その向上への取り組み

北海道旭川北高校 **中村康広先生**

新しい文章や言葉に触れる機会をつくることが必要

「語彙・読解力検定」に対して、生徒の学びのモチベーションの向上や学力の検証という機能を期待する声が既に高校現場から寄せられている。生徒の語彙力、読解力の現状と、「語彙・読解力検定」の可能性を、北海道旭川北高校・国語科の中村康広先生に伺った。

中村先生は「生徒に対して、近年、特に日常的な語彙力の低下を感じる」と語る。

「難解な語の意味を間違えるといったことではなく、日常的な言い回しが理解できなかったり、主語が二つ存在するような文章を書く生徒が増えています。生徒が接する大人の数が少なくなっていること、忙しくて読書の時間が確保できないこと、社会全体が『意味が通れば細かいことは良い』と物事を単純化していることなどが理由でしょう」

中村先生は「語彙力や読解力を高めるには新しい言葉や文章に接する機会をつくることが重要」と考え、朝読書で評論文を読ませたり、授業で自分の考えを書かせたりするようにしているという。

北海道旭川北高校
国語科
中村康広
Nakamura Yasuhiro

語彙力、読解力が生徒の知的好奇心を高める

「授業では評論文などの『読み解き方』を教えることと並行して、とにかくたくさん書かせています。生徒が考える状況を作るには、書くのが一番だろうと考えたからです。例えば、同じテーマに関する二つの文章を読ませて概要や相違点、更に自分の意見を書かせます。意見を自由に書かせることは、生徒のモチベーションを高める上で重要です」

書かせたものの添削に時間をかけるよりも、構成や表現に優れたものがある文章、接続語の工夫でもっと読みやすくなる文章など、その時々の観点でいくつか作品を選び、生徒に提示するようにしている。

「語彙力、読解力を伸ばすための指導であっても、教師が面白いと感じない取り組みは生徒も面白いと思いません。生徒の力を伸ばすには、教師も面白がることが大切です」

生徒が「語彙が増え、言葉にこだわったから読書や授業が面白くなった」と実感し、「もっと別のものを読みたい」と思うようになることが大切だと中村先生は考えている。

「生徒の知的好奇心を高めていくのが語彙力、読解力です。新しい検定が、生徒が自らの成長を確認する機会になることを期待しています」

教科語彙力と知識活用力の関係

語彙は学力向上に不可欠

「語彙・読解力検定」の開発に先立って、教科の語彙力と知識活用力の関係を明らかにするために、東京大、東京学芸大、東京工業大の教授、元教授らとベネッセコーポレーションの研究開発担当者が共同でつくるNPO法人「教育テスト研究センター（CRET）」が、08年1～2月、小学5年生と中学2年生を対象に調査を実施した。

国語、算数（数学）、理科、社会の4教科において、「教科学習に関係する語彙問題（24問）」と「教科知識を活用する問題（2大問）」を解いてもらい、結果を分析したところ、いずれの教科においても、語彙問題の得点が低い子どもは、活用問題の得点も低い傾向にあることが明らかになった。09年には大学生を対象にテストを実施したところ、やはり同じような関係が明らかになっている。

語彙力を上げれば知識活用力がすぐに伸びるとは限らないが、教科の用語を十分に理解することなしに学力を付けることは困難であると考えられる。語彙は学力向上を図る上で、欠かすことが出来ない要素といえる。

大学はこう考える

考えを自分の言葉で表現できる学生を

法政大

日常的な働き掛けで言葉への関心や好奇心を育む

大学の学びは、高度な語彙力、読解力を土台として主体的に調べ、自分の考えをまとめて伝えることが出来て初めて成立する。しかし近年、多くの大学で学生の正しい日本語を使う力の低下が指摘されるようになっている。法政大で初年次教育などを通じて日々学生の指導に当たる小林ふみ子准教授も「語彙力が低下した入学者が増えており、正しい言葉で表現させる指導が必要になっていると感じる」と語る。

「講義で知らない言葉に出合っても、自発的に調べようとしない学生が少しずつ増えている気がします。また、資料や文献の理解が浅いため、討論の場で『～っぽい感じ』と述べるなど、自分の考えを適切に表現できない入学生も目にします」

法政大
キャリアデザイン学部
小林ふみ子 准教授
Kobayashi Fumiko

「読み書きに自信がない言葉があったら辞書を引こう」と学生に繰り返し伝えることが大学教員にも必要になったと小林准教授。1年生対象の「基礎ゼミ」では、初年次教育として大学での学び方を指導するが、最近では言葉の正確な理解・表現の指導も重要な課題になっている。レポート返却の際も、誤った言葉遣いを見逃さずに指摘するなど日常的な働き掛けが重要だと言う。

「語彙力、読解力がないと、文章を咀嚼（そしゃく）できず、思考も深まりません。法政大ではセンター試験利用入試を除く多くの入試方式で論述式の問題を課していますが、これは『考えを自分の言葉で表現できる学生に入学してほしい』という大学からのメッセージです。言葉に対する関心や好奇心をもっと持ってほしいですね」

幅広い教養とコミュニケーション力を培う

立命館大

インプットとアウトプットを学びの中に意図的につくる

入学者の語彙力の低下を各大学が感じる一方で、学士力の確保など、大学教育に対する社会の要求は確実に高まっている。入学時から就職までさまざまな段階で学生の指導に当たってきた岡本直輝教授は、「就職活動でもエントリーシートや面接などで、語彙力や表現力が企業から厳しく問われている」と語る。

「1、2年次の段階で、自分の考えを整理し、アウトプットする経験を積んでおく必要があります。ただ、最近の学生は読書量が少ない上に、友人とのコミュニケーションも減っているように思います。学生への多様な情報のインプットの機会と、それを自分の中で消化し、アウトプットする機会を意図的につくることが大学に求められています」

立命館大
入学センター部長
岡本直輝 教授
Okamoto Naoki

文系学部で1年次から実施されている「基礎演習」は、ゼミ形式で課題学習、プレゼンテーションを展開し、インプットとアウトプットを体験する。更に、説得力のある文章を書くための「実践ライティング」を一部の学部で導入している。

岡本教授自身は、学生に新聞を読んで意見をまとめ、投書させることを授業に取り入れているという。

「企業が求めるのは、幅広い教養とコミュニケーション力を持った学生であることは、内定状況からも明らかです。新聞を授業に取り入れることで幅広い角度から社会の動きを知り、また意見を書くことで、面接の場などで自分の言葉で語れる力を身に付けさせたいと考えています。語彙力、読解力の向上のための取り組みを今後も広げていきたいです」

次号（臨時増刊号 Vol.2）に向けて

VIEW21 臨時増刊号 Vol.1「学びに向かう高校生をいかに育てるか」をお読みいただき、ありがとうございました。

高校生へのインタビュー、教育現場と企業との座談会、学びに向かう生徒育成を目指した取り組み事例、いずれの記事も、今後の学校づくりだけでなく、進路指導の枠組みづくりや、日常の教科指導・生徒指導に向けて何かのヒントを提供できればとの思いで企画、編集致しました。

いまは、時代の転換期であり、また、将来への足元を固める時期でもあります。簡単には解決し得ない課題が山積していますが、私たちベネッセコーポレーションは創業以来、学校組織の持つ変化への対応力をずっと見続けてきました。多くの先生方の、生徒を想う気持ちが強くあったからこそ、学校は変化し続けてこられたのだと思います。先生方のその強い想いが、これからの時代に向けてより良い形で実を結ぶことを信じています、そして願っています。

来年１月に発刊予定の臨時増刊号 Vol.2 では、そうした想いを形にする際に、押さえておく必要がある高校・高校生と大学との関係に焦点を当てた企画を考えています。

今号への率直なご意見をいただきながら、次号の企画を検討してまいります。

今後とも、ご指導をよろしくお願い致します。

VIEW21 臨時増刊号編集部一同

編集後記

◎「人間は死ぬまで夢をもて！ その夢が叶わなくても、しょせん夢だから。」佐賀のがばいばあちゃんのように、しなやかに元気に生きる率先垂範を大人全員がやらねば、と決意した編集でした（松田）

◎今回インタビューした高校生が「あなたにとって授業って何？」との問い掛けに「先生の人生経験を感じ、人生の先輩から授業を通して将来を学ぶこと」と答えてくれました。先生方の仕事の素晴らしさと重要性を改めて感じました（梅井）

◎先日、座談会に参加してくれた高校生の夢を見ました。短い時間の中で投げ掛けてくれた「想い」に強烈な印象を受けたせいなのでしょう。彼らの「やる気」を押すツボを、今後も探して行きたいと思います（榊原）

◎「学びに向かう高校生をいかに育てるか」という高い志のタイトルに悩みましたが、模試復習イベントなどで一生懸命学びに向かう多くの生徒たちや、学びを支える先生方や大学生講師に出会い、実現の可能性を確信しました（国枝）

◎『教科外学習で学びに向かう』のコーナーを担当しました。「講座を通じて生徒の思いがけない才能に気づいた。生徒が出来るまで信じ、待ってあげることの大切さを感じました」先生の言葉に胸が熱くなりました（今西）

◎学びが面白くなるための起点となるものは何かを考えさせられました。新しい事を受け止め、考える事を経たアウトプットの蓄積が更に新しい事を理解する力を養う。その起点の一つはやはり日本語だと実感する取材でした（二瓶）

◎臨時増刊号では、私たちベネッセコーポレーションの教育に対する姿勢と意志を強く発信しました。「ＶＩＥＷ21」通常号とは少しトーンが異なりますが、お伝えしたいメッセージは共通です（小泉）

VIEW21高校版・臨時増刊号に関するご意見、ご感想を編集部にお寄せください。

E-mail
view21_since-1975@mail.benesse.co.jp

VIEW21 高校版 臨時増刊号 Vol.1　2010年7月5日発行

発行人　山河健二
編集人　松田　実
発行所　（株）ベネッセコーポレーション 教育事業本部 高校教育事業ドメイン
印刷製本　大日本印刷（株）
編集協力　（有）ペンダコ
執筆協力　二宮良太
撮影協力　ヤマグチイッキ、川上一生

VIEW21 臨時増刊号編集部
〒163-1422　東京都新宿区西新宿3-20-2　東京オペラシティタワー22階
電話　03-3320-4537

©Benesse Corporation 2010